江戸時代ロシアへの漂流・抑留民

——漂流・抑留経緯とその歴史的意義——

木崎良平

一、はじめに

本稿は、江戸時代におけるロシアへの漂流・抑留民に関する研究である。すなわち、江戸時代において、海難事故にあい、ロシア領もしくはその勢力範囲に漂着した人々、あるいは漂流中外国船に救助され、何らかの事情でロシアに送られた人々、また、一九世紀初頭の日露の紛争の中でロシア人に捕えられ、あるいは抑留された人々について考察を加えたものである。

一体、漂流民に関する考察には、大きく言って、次の二つの方向がある。その第一の方向は、漂流民の異常な体験に考察の中心をおき、かれらの困難に満ちた生活や、かれらが外国滞留中に見聞したこと、その獲得した外国に関する知識・情報、あるいは、かれらの外国滞留中に果した事蹟について考察をすすめる方向である。その第二の方向は、海難事故そのものに考察の中心をおく方向である。これは、海難事故発生の原因考察を焦点として、海流・気象の状況、船の構造、あるいは遭難後の船員がとった処置等について、考察をすすめる方向である。

第一の考察方向は、江戸時代において、帰国漂民・抑留民の珍らしい見聞・異常な体験に興味を覚えた人々、あるいは、かれらの話から外国事情について情報を得ようとした人々がとった方向と同じような方向である。また、時代が降っては、外国に残っている史料によって、漂流・抑留民の生活・事蹟を明らかにしようとする研究者のとる方向でもある。これに対して、第二の考察方向は、海難事故研究者や、気象学者、船舶研究者たちが関心を示す方向である。

ところで、前者の方向による考察は、漂流を人文現象としてとらえ、その意味において歴史学的ではあるけれども、ともすれば、

個々の漂流事件の細かい点にとらわれ、単なる好事家的な考察に終始し、漂流の物語性に重きをおき、叙述に誇張あるいは誤謬がしばしば見られる。また、いくつもの漂流事件を全体的・綜合的にとらえ、大きな歴史の流れの中で考察するという視点に欠けるところがある。それに対し、後者の方向による考察は、種々の漂流事件を全体的にとらえようとする姿勢はあるけれども、研究者の関心が漂流そのものに向いているため、ややもすれば、漂流民の歴史的意義を見出すことは、その関心の外におかれ勝ちである。

こうしたことにかんがみ、本稿は、まずは江戸時代におけるロシアへの漂流・抑留民を全体的に考察することを第一の目標とし、その全体像をとらえた上で、これら漂流・抑留民の歴史的意義について、若干の説明を加えることを試みた。すなわち、わが国のいわゆる鎖国から開国への歴史において、嘉永六年（一八五三年）のペリーの来航に先立つ約六〇年にわたる日露交渉の経験は、重要な意味をもっているが、本稿は、こうした大きな歴史の中で、江戸時代における数多くの漂流民の中からロシア関係のものを拾いあげ、かれらのもつ歴史的意義について考察することを試みた。

その場合、その全体的考察の便宜のため、まずは、嘉永以前の江戸時代におけるロシアへの漂流・抑留民の「漂流・抑留大綱」を示し、ついで、かれらの「漂流・抑留経緯」をできる限り正確に記述して、また、その漂流・抑留民に関する主な史料・文献をあげ、ロシアへの漂流・抑留民についての今後の研究に、何らかの手掛りを提供することを試みた。こうして、かれらの漂流・抑留の全体像をとらえた上で、かれらのもつ歴史的意義について若干の説明を加えたのである。

二、ロシアへの漂流・抑留民大綱[1]

安政元年[2]（一八五四年）のわが国の開国以前の江戸時代において、ロシア勢力範囲、もしくはロシア領に漂着したり、ロシア人に捕えられたり抑留された日本人について、記録に残っているものを示せば次の如くである。

(一) 元禄大坂漂民

元禄八年（一六九五年）一一月、大坂から江戸へ向う途中遭難した大坂谷町の伝兵衛ら一行一五名。全員未帰還。

漂流すること七ヵ月、その間二名死亡。翌一六九六年六月、カムチャツカの南部オパラ河口に一三名漂着。伝兵衛は、一六九七年七月、カムチャダール人の部落にあったところを、当時カムチャツカ遠征中のアトラソフに見出され、アナドィルを経て一七〇一年一二月末、モスクワへ送られる。一七〇二年一月ピョートル一世に謁、一七〇五年ペテルブルグ日本語学校教師となる。一七

一〇年帰化、ガヴリエル＝ボグダノフと名乗る。没年未詳。

㈡　宝永南部漂民

宝永六年（一七〇九年）冬、遭難、翌一七一〇年四月、カムチャツカ―カリギル湾のボロブロヴォエ海岸に漂着した陸奥国南部領出身と思われるサニマ（三右衛門）ら一行一〇名。全員未帰還。

漂着時、カムチャダール人の襲撃を受け、四名殺され、六名が捕えられる。その後、カムチャダール人とロシア人との戦闘で二名が死に、サニマら四名はヴェルフネ―カムチャツカ要塞に連行される。サニマは、一七一三年のコズィレフスキーの北千島探検に加わり、千島地図の作成に協力する。翌一七一四年、ペテルブルグに送られ、伝兵衛の助手としてロシア人に日本語を教える。洗礼名はイヴァン。没年未詳。

㈢　薩摩若潮丸漂民

享保一三年（一七二八年）一一月初め、松平大隅守島津継豊手船若潮丸で薩摩を出帆、大坂へ向う途中遭難した宗蔵・権蔵ら一行一七名。全員未帰還。

享保一四年（一七二九年）六月七日、カムチャツカのロパトカ岬とアワチャ湾の間の海岸に漂着、コサック五十人長シュティンニコフの率いる一隊に襲撃され、一五名殺される。宗蔵と権蔵のみヴェルフネ―カムチャツカからニジニ―カムチャツカへと連行され、一七三一年ペテルブルグへ送られる。一七三四年アンナ女帝に謁、同年一〇月二〇日受洗、宗蔵はクジマ＝シュルツ、権蔵はデミヤン＝ポモルツェフと名乗る。一七三六年、ロシア科学アカデミー付属日本語学校教師となるが、宗蔵は同年九月一八日、四三歳で没。権蔵は同日本語学校主幹アンドレイ＝ボグダノフと共に、世界最初の『露日辞典』（一七三八年成）等の日本語参考書数種を著わす。一七三九年一二月一五日、二一歳で没。

㈣　南部多賀丸漂民

延享元年（一七四四年）一一月一四日、陸奥国南部領佐井村の竹内徳兵衛船多賀丸一二〇〇石積で佐井港を出帆、江戸へ向う途中、同一一月二八日遭難した船頭竹内徳兵衛ら一行一七名。全員未帰還。

漂流中六名死亡。延享二年（一七四五年）五月一六日、千島オンネコタン島に漂着。上陸後、竹内徳兵衛死亡。生存者一〇名は、六月一五日、同島へ来た毛皮税徴集人ノヴォグラブレンヌイらに見出され、ボリシェレツクに送致される。翌年全員帰化。一七四

七年、病気の利助（パヴェル＝アレフィエフ、同年没）を除く九名はヤクーツクへ送られる。同地で漂民は二班に分けられ、磯治（フォーマ＝ラベデフ＝メリニコフ）。八兵衛（アンドレイ＝レシェトニコフ）・勝右衛門（グリゴリー＝スヴィニン）・伊兵衛（ヴァシリー＝パノフ）・久太郎（ピョートル＝チェルノフ）の五名はペテルブルグへ送られ、日本語学校教師となる。佐之助（イヴァン＝イヴァノヴィチ＝タタリノフ）・利八郎（マトヴェイ＝グリゴリエフ＝ポポフ）・長助（フィリップ＝ニキフォロフ＝トラペズニコフ）・久助（イヴァン＝アファナーシェフ＝セメノフ）の四名はヤクーツクに残留。

ペテルブルグ組の磯治・八兵衛は一七五三年同地で死亡。同年、日本語学校のイルクーツク移転がきまり、勝右衛門・伊兵衛・久太郎の三名は、一七五四年五月二六日イルクーツク着、同地航海学校付設の日本語学校教師となる。ヤクーツク残留組の四名も、一七五四年イリムスクへ移り、日本語教師をつとめる。一七六一年、イルクーツクに移り、ペテルブルグ組と合流。一七八六年までに、この七名も相次いで死亡。

(五) 伊勢神昌丸漂民

天明二年（一七八二年）一二月九日、伊勢奄芸郡白子村彦兵衛持船神昌丸一〇〇〇石積で白子浦出帆、江戸へ向う途中、一二月三日、駿河灘で遭難した船頭の大黒屋光太夫ら一行一七名。寛政四年（一七九二年）九月五日、光太夫・水主の磯吉・賄の小市の三名、根室に帰着。

漂流中一名死亡、天明三年（一七八三年）七月二〇日、アリューシャン列島のアムチトカ島に一六名漂着。同島に四年間滞留中、七名死亡。一七八七年七月一八日、古材や流木で船を作り、同島発、八月二三日ウスチーカムチャツカ着、ニジニーカムチャツカで一年滞留、その間に三名死亡。一七八八年六月一五日、生存者六名は同地発、チギリ、オホーツク、ヤクーツクを経て、翌年二月七日にイルクーツク到着。同年冬、水主の庄蔵（フョードル＝ステパノヴィチ＝シトニコフ）が、一七九一年春には水主の新蔵（ニコライ＝ペトロヴィチ＝コロトゥイギン）が帰化。両名は、同年九月、イルクーツク中央国民学校付設の日本語学校教師となる。この年一月一三日、水主の九右衛門病死。

船頭の光太夫は、同一七九一年一月一五日、帰国願いのため、博物学者キリル＝ラクスマンに伴なわれイルクーツク出発、二月二九日ペテルブルグ着。エカテリナ二世に謁、九月一三日帰国のこと許可される。一一月二六日ペテルブルグ発、一七九二年一月二三日、イルクーツクに帰った。五月、光太夫・磯吉・小市の三名はイルクーツク出発、八月オホーツク着、九月一三日（寛政四

年八月九日）、キリルの次男アダム＝ラクスマン遣日使節に伴なわれ、エカテリナ号でオホーツク出帆、一〇月九日（寛政四年九月五日）根室港に帰着した。

(六) 仙台若宮丸漂民

寛政五年（一七九三年）一一月二七日、仙台牡鹿郡石巻米沢屋平之丞持船若宮丸八〇〇石積で石巻出帆、江戸へ向う途中、同月二九日、岩城領塩屋崎沖で遭難した船頭の平兵衛ら一行一六名。文化元年（一八〇四年）九月六日、水主の津太夫・儀兵衛・左平・太十郎の四名、長崎港外帰着。

寛政六年（一七九四年）五月一〇日、アリューシャン列島アンドレヤノフスキー諸島の一島に漂着。間もなく船頭の平兵衛死亡。生存者一五名はウナラスカ島に渡る。寛政七年（一七九五年）四月三日、同島出帆、六月二八日オホーツク着。三班に分れ、同年末までに順次イルクーツク着。旅中、水主の市五郎、病気でヤクーツクに残留。寛政八年（一七九六年）、善六（ピョートル＝ステファノヴィチ＝キセリョフ）、辰蔵（アンドレイ＝アレクサンドロヴィチ＝コンドラドフ）帰化。同年夏、善六は伊勢の庄蔵死亡のあとを受け、同地日本語学校教師補となる。寛政九年（一七九七年）初め、民之助（イヴァン＝メイトロヴィチ＝キセリョフ）、八三郎（セミョン＝グレゴリエヴィチ＝キセリョフ）帰化。寛政一一年（一七九九年）二月、吉郎次病死。

享和三年（一八〇三年）三月七日、生存者一三名はイルクーツク発、四月二七日ペテルブルグ着。旅中、楫取の左太夫・水主の清蔵・銀三郎の三名落伍。五月一六日、漂民らアレクサンドル一世に謁。巳之助（ミハイル＝ジェラロフ）・茂次郎（ザハル＝ブルダコフ）帰化。この両名と先に帰化していた善六・辰蔵・巳之助・八三郎の計六名はロシアに残留、津太夫・儀兵衛・左平・太十郎の四名は送還ときまる。津太夫らは、六月一六日（ロシア暦七月二二日）、第二回遣日使節レザノフに伴なわれ、ナデジダ号でクロンシュタット出航、南米大陸を迂廻、オアフ島、カムチャツカのペテロパウロフスクを経て、文化元年九月六日（一八〇四年九月二七日）長崎港外に帰着。

(七) 南部慶祥丸漂民

享和三年（一八〇三年）一一月八日、陸奥国南部領牛滝村源右衛門持船慶祥丸五八二石積で、箱館在臼尻村出帆、江戸に向う途中、一一月二九日、総州九十九里浜沖で遭難した船頭の継右衛門ら一行一四名。文化三年（一八〇六年）七月二日、継右衛門・賄の専右衛門・水主の吉九郎・弥内・勘右衛門・炊の岩松の六名、択捉島シベトロ番屋帰着。

漂流中八名死亡。生存者六名は文化元年（一八〇四年）七月一八日千島のポロムシリ島に漂着、小舟でカムチャツカのロパトカ岬へ渡り、途上、アイヌの舟に救助され、九月初旬ペテロパウロフスク着。文化二年（一八〇五年）六月中旬、小舟で同地脱出、ポロムシリ島からはラショワ島酋長マキセンに伴なわれ、閏八月初旬ラショワ島着、同島で越冬。文化三年（一八〇六年）二月一三日、アイヌに伴われラショワ島発、マカンルル島まで南下、隣島のレブンチリホイ島で小舟を作り、漂民らだけで渡海、七月二日、択捉島シベトロ番屋に帰着。

(八) 文化魯寇樺太島捕虜

文化三年（一八〇六年）九月一二日、樺太久春古丹において、フヴォストフの率いるユノナ号に捕えられた同島番人酉蔵・富五郎・福松・源七の四名。文化四年（一八〇七年）六月六日、宗谷番屋帰着。

酉蔵ら四名は、ペテロパウロフスクに連行され、同地で越冬、翌文化四年（一八〇七年）四月二三日、同じユノナ号で択捉島ナイホ沖に至る。同所で捕えられた番人など（次項参照）と、六月五日、北海道利尻島沖で放還され、翌日宗谷番屋に帰着。

(九) 文化魯寇択捉島捕虜

文化四年（一八〇七年）四月二五日、択捉島ナイホにおいて、フヴォストフの率いるユノナ号に捕えられた同島番人五郎次ら五名と、五月二日同島シャナで捕えられた南部藩砲術師大村治五平および津軽藩足軽金沢久蔵の計七名。久蔵は翌日解放、五郎次と左兵衛を除く択捉島番人ら長助・六蔵・三助の三名と大村治五平の計四名は、樺太島番人四名とともに、六月六日宗谷番屋帰着。五郎次は文化九年（一八一二年）八月四日、国後島センベコタン沖に帰着。

捕虜となった五郎次と左兵衛は、ユノナ号で文化四年六月二三日オホーツクに連行され、抑留中、文化六年（一八〇九年）五月～一二月、および文化七年（一八一〇年）五月～文化八年（一八一一年）五月の二度にわたり逃亡、ツングース部落を彷う。二度目の逃亡時、左兵衛病死。その後、五郎次は文化八年九月末ヤクーツクへ送られ、同年一二月イルクーツクに至る。文化九年（一八一二年）五月初め、オホーツクに戻り、六月二六日、摂津歓喜丸漂民六名（次項参照）とともに、リコルドの率いるヂャナ号で同港出帆、八月四日、国後島センベコタン沖帰着。八月一二日最終的に同島上陸、翌八月一三日同島泊会所に収容された。

(一〇) 摂津歓喜丸漂民

文化七年（一八一〇年）一一月二二日、摂津御影村加納屋十兵衛持船歓喜丸一一〇〇石積で、大坂出帆、江戸へ向う途中、翌一

一月二三日紀州三崎沖で遭難した船頭平助ら一行一六名。文化九年（一八一二年）八月四日、水主の与茂吉・忠五郎・清五郎・安五郎・嘉蔵・吉五郎の六名、国後島センベコタン沖帰着。文化一〇年（一八一三年）九月一六日、水主の久蔵、箱館港帰着。

漂民一六名、文化八年（一八一一年）閏二月七日、カムチャツカ半島中部東海岸に漂着。上陸後、船頭平助ら九名凍死。生存者七名はロシア人に救助され、三月一四日頃、ニジニーカムチャツカに至る。文化九年（一八一二年）一月同地発、マルカ、ペテロパウロフスクを経て、五月下旬オホーツク着。凍傷のため同地に残った久蔵を除く漂民六名は、択捉島番人五郎次（前項参照）とともに、リコルドの率いるヂャナ号で、六月二六日オホーツク出帆。八月四日国後島センベコタン沖帰着。与茂吉は同日、忠五郎は一一日、清五郎・安五郎・嘉蔵・吉五郎・択捉島番人の五郎次は一二日、それぞれ国後島に上陸、泊会所に収容された。（ただし、五郎次だけは一三日収容。）

久蔵は、文化九年（一八一二年）八月オホーツク発、イルクーツクに送られ、翌文化一〇年（一八一三年）一月同地発、オホーツクに戻り、七月三〇日同港発、日本側に捕えられていたゴロウニン受取りのリコルドの率いるヂャナ号で、九月一六日箱館港帰着。

㈡ 高田屋観世丸捕虜

文化九年（一八一二年）八月一四日、国後島ケラムイ岬沖で、リコルドの率いるヂャナ号に捕えられた択捉島請負人高田屋嘉兵衛持船観世丸六五〇石積の船主嘉兵衛ら六名。ペテロパウロフスクへ連行され、同地越冬中三名死亡。嘉兵衛・水主の金蔵・平蔵の三名のみ、文化一〇年（一八一三年）四月一八日、リコルドの率いるヂャナ号で同地出帆、五月二六日国後島センベコタン沖に帰着。

㈢ 薩摩永寿丸漂民

文化九年（一八一二年）一〇月一九日、薩摩松平豊後守島津斉興手船、同国高城郡水引郷船間島の嘉太郎船永寿丸一二〇〇石積で、川内港出帆、江戸へ向う途中、一二月三日、紀州熊野灘で遭難した船頭喜三左衛門ら一行二五名。文化一三年（一八一六年）七月九日、喜三左衛門と弟の水主の角次・佐助の三名、択捉島シベトロ番屋帰着。

漂流中一三名死亡。文化一〇年（一八一三年）九月二四日、千島のハラマコタン島に漂着。同夜嵐のため六名溺死、上陸後間もなく三名餓死。生存者三名は、一〇月二〇日頃、アイヌに助けられ、同月末オンネコタン島に渡り越冬。文化一一年（一八一四

年）五月一〇日頃、アイヌに伴なわれ同島発、ポロムシリ島に渡る。六月下旬、ロシア徴税役人とともに同島発、八月末ペテロパウロフスク到着。

文化一二年（一八一五年）五月中旬、ペテロパウロフスク出帆、オホーツクを経て、八月一日択捉島沖に至るも、風波荒く、九月一三日、ペテロパウロフスクに乗戻る。尾張督乗丸漂民（次項参照）と会う。文化一三年（一八一六年）五月二八日、尾張漂民とともに、聖パヴェル号で同所出帆、択捉水道で小舟を貰い、得撫島を経、七月七日、択捉島東北端に上陸、七月九日同島シベトロ番屋帰着。

㈢ 尾張督乗丸漂民

文化一〇年（一八一三年）一一月四日、名古屋納屋町小島屋庄右衛門持船督乗丸一二〇〇石積で、伊豆子浦出帆、名古屋へ帰航途上、同夜遠州御前崎沖で遭難した船頭の重吉ら一行一四名。文化一三年（一八一六年）七月九日、重吉と水主の音吉の両名のみ択捉島シベトロ番屋帰着。

遭難時一名、漂流中一〇名死亡。遭難後一年五か月の漂流ののち、文化一二月（一八一五年）二月一四日、重吉と水主の音吉・半兵衛の三名、メキシコ沖で英国船フォレスタ号に救われる。五月中旬、アラスカのシトカ入港、六月下旬同港発、八月一五日頃ペテロパウロフスク着。九月中旬、択捉島沖より乗り戻った薩摩永寿丸漂民（前項参照）と出会い、同居越冬。文化一三年（一八一六年）五月二八日、薩摩漂民三名と聖パヴェル号で同地出帆。帰国船上で半兵衛病死。七月九日重吉と音吉の二名のみ、択捉島シベトロ番屋帰着。

㈣ 越後早川村漂民

天保三年（一八三二年）一月、松前から江戸へ向う途中、三陸沖で遭難した北前船乗組みの、越後早川村次郎右衛門ら一行七名。天保七年（一八三六年）七月二五日、次郎右衛門・伝助・長太の三名、択捉島フレベツ沖帰着。

漂流中三名死亡。天保三年閏一一月、オアフ島に漂着。天保五年（一八三四年）六月生存者四名オホーツクに送られる。同地で一名死亡。天保六年（一八三五年）アラスカのシトカへ送られる。天保七年（一八三六年）五月、オルロフ少尉の率いる露米会社船ウナラスカ号でシトカ発、七月二五日択捉島フレベツ沖に帰着。

㈤ 越中長者丸漂民

天保九年（一八三八年）一〇月一〇日、越中富山古寺町能登屋兵右衛門持船長者丸六五〇石積で、箱館出帆、江戸へ向う途中、一一月二三日、仙台唐丹港沖で遭難した船頭の平四郎ら一行一〇名。天保一四年（一八四三年）五月二三日、賄の太三郎・船親父の八左衛門・水主の次郎吉・六兵衛・七左衛門・炊の金蔵の六名、択捉島フレベツ会所帰着。

漂流中三名死亡。天保一〇年（一八三九年）四月二四日、太平洋上でアメリカ捕鯨船ゼームズ－ドーバー号に救助される。生存者七名は、そののち同船を含め四隻の捕鯨船に分乗、同年九月末までに順次オアフ島に到着。同島で船頭平四郎死亡。天保一一年（一八四〇年）七月下旬、生存者六名はイギリス船でオアフ島発、九月上旬ペテロパウロフスク着。同所で越冬、天保一二年（一八四一年）六月上旬同所出帆、七月上旬オホーツク着、一年滞留。天保一三年（一八四二年）七月中旬同所発、九月上旬シトカ着。天保一四年（一八四三年）露米会社支配人エトーリン少佐より藩主への贈物として時計を貰い、三月下旬、ガヴリロフ少尉の率いるプロムイスル号でシトカ出帆、五月二三日フレベツ会所帰着。

(六) 紀伊天寿丸漂民

嘉永三年（一八五〇年）一月六日、紀伊日高郡薗浦の和泉屋庄右衛門持船天寿丸九五〇石積で、伊豆子浦出帆、紀州有田へ帰航途上、駿河沖で遭難した船頭の九助（虎吉）ら一行一三名。嘉永四年（一八五一年）一一月二八日、船頭の九助・賄の菊治郎・炊の佐蔵ら五名長崎帰着。嘉永五年（一八五二年）六月二四日、楫取の長助・表仕の甚蔵・水主の太郎兵衛・与吉・清兵衛・浅吉・新吉ら七名、伊豆下田帰着。

嘉永三年（一八五〇年）三月一二日、北千島沖でアメリカ捕鯨船ヘンリー－ニーランド号に救助され、九助らアメリカ組七名と長助らロシア組六名に分けられ、長助らは三月一九日に、アメリカ組のうち浅吉と新吉は八月一〇日にペテロパウロフスクに到着。同地で水主の半六死亡。嘉永四年（一八五一年）六月二〇日、ロシア組七名はペテロパウロフスク出帆、七月七日アヤン着。九月一日同港出帆、一〇月一日シトカ到着。嘉永五年（一八五二年）四月二三日、リンデンベルグの率いるメンシコフ公号で同所出帆、六月二四日伊豆下田港着。同月二九日、伊豆中木村浜に上陸帰国した。

九助らアメリカ組五名は、二隻の捕鯨船に分乗し、嘉永三年（一八五〇年）九月に順次オアフ島到着。一〇月一一日、アメリカ船で同島出帆、香港・マカオ・上海・乍浦を経て、嘉永四年（一八五一年）一一月二八日、中国船で長崎帰着。

以上示した江戸時代におけるロシアへの漂流・抑留民大綱を一覧して気がつくことは、まず、当然のことながら、かれらが記録

にとどめられた最初は、ロシア勢力がカムチャツカ半島に及び始めた一七世紀末ということである。ついで、一八世紀前半、ロシアが北千島に勢力を及ぼすに及んで、そこに漂着した日本人がカムチャツカ・イルクーツクへと送られることになる。一方、ベーリングの北太平洋探検後、ロシアがアリューシャン列島へ進出するようになると、この方面に漂着した日本人も記録に留められるようになる。すなわち、漂流日本人についての記録は、裏から言えば、ロシアの東方進出の記録である。

第二に、これら漂流・抑留民は、時代の変遷とともに、異った性格をもつ三つの群に分類されるということが、その漂流大綱表から観察される。すなわち、㈠元禄大坂漂民～㈣南部多賀丸漂民の第一群、㈤伊勢神昌丸漂民～㈢尾張督乗丸漂民の第二群、㈣越後早川村漂民～㈥紀伊天寿丸漂民の第三群である。第一群の漂民は、全員未帰還で、ロシアの東方進出の基盤づくりに、ある役割を果した。かれらは、ロシア人に日本に関する情報を伝え、日本語を教えた。第二群の漂民は、ロシアの対日通商要求の手段として送還されて来たもの（㈤伊勢神昌丸漂民・㈥仙台若宮丸漂民）、および幕府がその要求を拒否し、険悪化した日露関係の中での漂流・抑留民である。（㈦南部慶祥丸漂民～㈢尾張督乗丸漂民）。第三群の漂民は、その後しばらくの日露関係平静期という間をおいて、イギリスの東アジア政策の積極化、アメリカの広東貿易進出の企てと呼応して、ロシアが再び対日接渉を強化し、対日通商関係樹立のための手段として送還して来たもので、営利企業体の装いをつけながら事実上は行政機関化していた露米会社の手によって送還されて来たものである。

では、以下、わが国開国以前におけるロシアへの漂流・抑留民を、これら三つの群に分ち、それぞれの漂流・抑留経緯をやや精しく見、かれらが日露交渉史上、いかなる意味をもったかという点について考察を加えたい。

註

(1) 本章の典拠については、次章以下の各漂民・抑留民経緯の註を参照のこと。

(2) 安政元年（一八五四年）の開国から幕末までのロシアへの漂流民には、次の如きものがある。

㈠ 安政五年（一八五八年）九月三〇日、伊豆下田にロシア艦で帰着した松前民伝九郎・甚吉・久米吉・由松ら四名の沿海州への漂着民（『維新史料綱要』）。

㈡ 安政六年（一八五九年）四月、樺太島見廻り中、同島西海岸で遭難、六月一九日、ニコラエフスク着、八月一三日ロシア船マレチョロ号でクシュンナイ帰着の箱館奉行津田近江守正路家来の足軽倉内忠右衛門。（『幕末外国関係文書』、籔内保明『北蝦夷地御用留』）。

㈢ 慶応元年（一八六五年）六月四日、佐渡島北方で遭難した松平加賀守領分越中射水郡六渡寺村平次郎船の船頭清八・与吉・次三郎・北次

郎・与三次郎の五名。ウラヂオストクに漂着、一〇月ロシア軍艦アメリカ号で長崎帰着。（『維新史料綱要』）。

㈣ 慶応二年（一八六六年）、宗谷海峡西で遭難した松前民栄吉・竹松・竹蔵・アイヌのインキョーの四名。慶応三年（一八六七年）九月三〇日、ウラヂオストクよりイギリス船で長崎帰着。（『維新史料綱要』）。

三、日露国交開始交渉前の漂民

寛政四年（一七九二年）、ロシア第一回遣日使節ラクスマンに伴われ、伊勢神昌丸漂民が帰国し、日露国交開始交渉が始まった。本章は、それ以前のロシアへの漂民について、その漂流経緯を示し、かれらの日露交渉史上の意味について考察せんとしたものである。

㈠ 大坂元禄漂民漂流経緯[1]

元禄八乙亥年（一六九五年）一一月[2]、エドヴニ（江戸船）、長さ一五サージェン（約三二メートル）、幅と高さ四サージェン（約八・五メートル）に、伝兵衛ら一五人が乗組み、他の船三〇艘[3]とともに大坂出帆、江戸に向う。積荷は米・酒・絹織物・南京木綿・木綿・白砂糖・氷砂糖・檀材・鉄など。伝兵衛の父の名はディアサといい大坂の商人であった。伝兵衛も同じ大坂商人アワスディア＝マタウィン（淡路屋又兵衛か）の番頭をつとめ、妻と二人の子供がいた。住んでいたのは大坂谷町通りで、苗字は立川といったらしい[4]。

出帆後、嵐のため船団は分散、伝兵衛の船は西風により東へ流され、二八週間漂流。遭難時、沈没を免れるため檣を切り倒した際、二名が海中に落ち死亡。一六九六年六月頃[5]、一行一三名[6]がカムチャツカ南部のオパラ河口に漂着[7]。翌日の夜、四〇艘の小舟に分乗した約二〇〇人の原住民の襲撃を受ける。その際二名が殺害された。伝兵衛は捕えられ[8]、一ヵ月ほどのち、カムチャツカ川支流ナネ河畔に連行される。残りの一〇名も国籍不明の船でどこかへ連れ去られた。伝兵衛はナネ河畔のカムチャダール部落で約一ヵ年を過す[9]。

一六九六年七月一八日、カムチャツカ遠征中のコサック五〇人長ウラヂミル＝アトラソフが、カムチャツカ川に注ぐクレストヴカ（カヌーチ）河口に達した[10]。その後、カムチャツカ川下流地域征服、イーチャ河畔に達し、伝兵衛の噂を聞き、かれを自分のところへ来させる（「アトラソフ第一報告」）。伝兵衛はアトラソフと二ヵ年を過し（「アトラソフ第二報告」）、一六九九年七月二日、アトラソフとともにアナドィルに到着した[11]。同年、アナドィル出発、ヤクーツクに向ったが、出発後六日目、伝兵衛は不慣れなスキー旅行

のため足を腫らし、アナドィルに返され（「第二報告」）、アトラソフが一足先きにヤクーツク着、一七〇〇年六月三日、同地役所で「カムチャツカ発見に関する第一の報告」を行う。アトラソフはその後モスクワに赴き、一七〇一年二月一日、シベリア庁に「第二の報告」を提出。

アナドィルに戻った伝兵衛も、やがてヤクーツクに送致されたが、一七〇一年一一月一日、シベリア庁はかれをモスクワに送ることを命じ[12]、伝兵衛は同年末モスクワに到着。一七〇二年一月八日、プレオブラジェンスコエ村でピョートル一世に謁[13]、また同月初旬、シベリア庁でいわゆる「伝兵衛物語」をなした。同年四月一六日付勅令で、ピョートルは伝兵衛にロシア語を教え、ロシア人の子供に日本語を教えさせるため、かれをシベリア庁から砲兵省に移すことを命ずる[14]。一七〇五年一〇月一六日、ピョートルは、砲兵総監アレクサンドル＝アルチロヴィチ大公およびモスクワ知事ヤコフ＝ヴィリモヴィチ＝ブリュース砲兵少将に対し、先の勅令が実行されたかどうかの調査を命ずる[15]。なお、この年、ペテルブルグに日本語学校が開設され、伝兵衛はそこで教師をつとめたという[16]。一七〇七年、伝兵衛は商相マトヴェイ＝ペトロヴィチ＝ガガリン公の邸に引取られる[17]。一七一〇年、伝兵衛はピョートルに帰国を嘆願したが許されず、洗礼を受け、ガヴリエル＝ボグダノフと名乗る[18]。

註

（1）伝兵衛に関する主な史料・文献には次のようなものがある。

(ア)「アトラソフの第一報告」（ロシア中央国立文書館・シベリア庁関係文書・第一四二二号・一～一二丁。）。

(イ)「アトラソフの第二報告」（前掲文書・第一二九二号・七〇九～七一三丁）。以上、二つの報告は、一八九一年、オグロブリンの「アトラソフのカムチャツカ発見に関する二つの物語」（N. N. Ogloblin, Dve skaski V. Atlasova ob otkrytii Kamchatki Chteniya v Imperatorskom Obshchestve istorii i drevnostej rossijskikh pri Moskovskom Universitete 1891, Vol. 3, pp. 1～18）で初めて公表された。

(ウ)「伝兵衛物語」）前掲文書・第一二八二号・七九～八三丁）。これも、オグロブリンの「ロシアにおける最初の日本人」（Ogloblin, Pervyj yaponets v Rossii, Russkaya Staritsa, Stb., Oct. 1891）で公表された。

(エ) Müller, G. F., Sammlung Russischer Geschichte, 9 vols., St. Petersburg, 1732～1764

(オ) Berg, L. S., Otkrytie Kamchatki i ekspeditsii Beringa 1725～1742, Moskva, 1924, 1935, 1946（第二版邦訳、小場有米訳『カムチャツカ発見とベーリング探検』、昭一七、竜吟社、上記(ア)～(ウ)の邦訳がある）。

(カ) 村山七郎『漂流民の言語』、昭四〇、吉川弘文館、上記(ア)～(ウ)の邦訳がある。

(キ) 高野明『日本とロシア』、昭四六、紀伊国屋書店、上記(ウ)の邦訳がある。

(ク) Fainberg, E. Ya., Yapontsy v Rossii v period samoizoliatsii Yaponii, Yaponiya Vaprosy istorii, Moskva, 1951

なお、伝兵衛に関する主な史料・文献については、木崎「立川伝兵衛に関する史料等」（『立正史学』四三、昭五三、一〇七～一〇八頁）参照のこと。また本項は特に註記しない限り、上記(ウ)による。

(2) 一七〇二年一月になされた「伝兵衛物語」に、「大坂の町を出帆してから今七年目である。」、「故国を出たのは冬であった。」、「二八週間漂流した。」、「伝兵衛は仲間とともに一ヵ月クリル人たちのところ（カムチャツカ半島南部）にいた。」、「カムチャツカの地で冬まで六ヵ月暮した。」、「カムチャツカ河畔で一ヵ年近く暮した時、アトラソフがやって来た。（一六九七年七月）」とあることから、逆算して推定。

なお、わが国で初めて伝兵衛のことを伝えた外務省編『外交志稿』明一七、に「紀元二千三百五十四年甲戌東山天皇元禄七年（西暦千六百九十四年）、大坂ノ船露西亜東察加ノオパラ河口ニ漂着ス。全船溺死僅ニ一人ヲ存ス。露国官吏之ヲ莫斯果府ニ送致ス。」とあるが、この紀年は誤り。

(3) 「アトラソフの第一報告」では一二艘。

(4) 「伝兵衛物語」末尾に、「万九ひち屋、たに万ちと本りにすむ、立川伝兵衛」とある（高野前掲書五五頁）。

この記載から推測すると、伝兵衛は万九質屋（万屋九兵衛?）を営んでおり、淡路屋の荷物輸送の上乗役（宰領）として乗船したものと思われる。

(5) 推定による。註(2)参照

(6) 「アトラソフの第一報告」では一二名。

(7) ミューラーの推定。ベルグ前掲書一八六頁。

(8) 「アトラソフの第一報告」では、クリル人が伝兵衛ら三名を名捕え、二名は腐った魚と根菜を食べて死に、伝兵衛だけが残ったとある。

(9) 「アトラソフの第二報告」では二年。

(10) ベルグ前掲書、七三頁。

(11) 同書、一八七頁。

(12) Fainberg, Russko-yaponskie otnosheniya v 1697～1875 gg., Moskva, 1960, p.20（小川政邦訳『ロシアと日本』、昭四八、新時代社、二八頁）。

(13)～(15) 同書二一頁（邦訳二九頁）

(16) Bartold, V. V., Istoriya izucheniya vostoka v Evrope i Rossii, 2nd ed.. Lening., 1925（外務省調査部訳『欧州殊に露西亜における東洋研究史』、昭一二、生活社）では、この日本語学校の存在を否定している。（邦訳三七九～三八〇頁。）しかし、ピョートルの何度かの伝兵衛のロシア語学習に関する勅令が出ていることもあり、伝兵衛が正規の学校においてでなかったにせよ、日本語教師をつとめたことは、ほぼ間違いない。その場所は、のちにイルクーツク日本語学校が同地の航海学校に付設されたことから考え、ペテルブルグの同様の数学航海学校であったとも考えられる。

(17) ファインベルグ前掲書二一頁（邦訳二九頁）。

(18) Y＝J＝ゲオルギエフ「日露文化交流史」（APNプレスニュース、一九七一年、七月一三日号）によれば、当時の「ペテルブルグ主教管区の信徒名簿」に日本人の子で、一七〇六年か一七〇七年生れの画家のアンドレイ＝ボグダノフという者があり、これが伝兵衛の子供である

とあることから推定。なお、アンドレイ＝ボグダノフと同名の一六九二年生れのロシア人は、一七三六年創設の科学アカデミー付設の日本語学校主幹となった。この両名が混同され、日本語学校主幹のボグダノフは伝兵衛の子供、もしくは次項で説くサニマの子供であるとする説（平岡雅英『日露交渉史話』昭一九、筑摩書房、一四六頁）も出た。

㈡ 宝永南部漂民[1]

宝永六己丑年（一七〇九年）一一月[2]、サニマ（三右衛門）ら一〇名は日本を出帆[3]、嵐にあい、本船を失い、一七一〇年四月[4]、カムチャツカ東海岸、ペテロパウロフスク北方、カリギル湾のボロブロヴォエ海岸に小舟で漂着。漂着後、カムチャダール人の襲撃を受け、四名が殺され、六名が捕えられる。間もなく、カムチャダール人とロシアのコサックとの戦闘が起り、漂流民二名死亡、残るサニマら四名はヴェルフネーカムチャツカ砦へ連行された[5]。

一七一一年三月二〇日、アナドィルへ帰任する途中の代官ピョートル＝チリコフが、部下の反乱により殺される。その首謀者ダニラ＝ヤコヴレヴィチ＝アンツィフェロフと、イヴァン＝ペトロヴィチ＝コズイレフスキーは、同年四月一七日付で、ピョートル一世宛「嘆願書」を提出、罪状軽減のため千島遠征を行うことになり、同年八月一日～九月八日、北千島探検[6]。この頃、漂民のうち二名が、わずかながらロシア語を覚え、千島や日本について報告をなす[7]。一七一二年九月一〇日、カムチャツカ新長官ヴァシリー＝コレソフが着任したが、コズイレフスキーは新長官に対し、「手書の地図」、「（ロパトカ）岬すなわち海峡までの経路と海峡向いの島々について」という手記、およびサニマらの船から入手したという平打の、あるいは塊の金貨二二ゾロートニク（約九四グラム）を提出した[8]。

一七一三年四月一三日、コズイレフスキーは五五人のコサック、一一人の原住民を率い千島探検に出発、サニマは水先案内人および通訳として同行した。コズイレフスキーは、ポロムシリ島で択捉島から来ていたアイヌのシャタノイ[9]、および二人の異国人を捕え、それらの者およびサニマから得た情報で、「カムチャツカ岬から海峡を越えた島々への、さらにマトマンスキー島（松前島）への旅行記」および地図を作成し、コレソフに提出した[10]。

その後、サニマはヤクーツクに送られ、受洗、イヴァンと名付けられる[11]。一七一四年ペテルブルグ着[12]。旅中、トボリスクでロシアの捕虜として同地にあったスウェーデンのフィリップ＝ヨハン＝タベルト＝ストラレンベルグに会う[13]。ペテルブルグでは、伝兵衛の助手として、ロシア人に日本語を教えたともいう[14]。

註

(1) サニマに関する主な史料・文献は次の如くである。

(ア) 本文中に示した「ピョートル一世への嘆願書」(Pamyatniki sibirskoj istorii XVⅢ veka, vol. 1, 1700~1713, Spb., 1882, p. 448) や、「手記」などは、ベルグの『カムチャツカ発見とベーリング探検』などで紹介されている。

(イ) 村山七郎「ロシヤへの漂流民サニマについて」(『日本歴史』昭四〇、二三二号、前掲(ア)の嘆願書の抄訳がある)。

(2) 漂民のカムチャツカ漂着時を規準とし、伝兵衛らの如く半年近く漂流したものとして推定。

(3) サニマの出身地は不明、村山氏は松前とされるが（前掲(イ)の論文）、コズイレフスキーが一七二六年に作成した地図に見える地名に、マトマイ（松前）、トイナロイ（津軽）、ナンブ（南部）、シェンダ（仙台）、エド（江戸）、イシ（伊勢）、トゥマヌ（熊野）とあり、首都の江戸・信仰の中心地伊勢・熊野を別とすれば、東北地方の地名が多く、サニマはこの地方の出身者であったとも思われる。

(4) ファインベルグ『ロシアと日本』二二頁、邦訳三一頁

(5) 「ピョートル一世への嘆願書」による。なお、サニマらの漂着の前々年、一七〇八年にもカムチャツカに漂着した日本人があり、うち四名が代官チリコフのもとに連れて来られ、サニマらの一〇名は、うち四名がカムチャダールに殺され、六名がアンツィフェロフによって捕えられたとする説もある。(Sgibnev, A., Popytki russkikh k zavedeniyu torgovykh otnoshenij s Yaponiej, Morskoj Sbornik, vol. c., 1, 1869, p.38; Lensen, The Russian Push Toward Japan, Princeton, 1959, p. 41)

(6) ファインベルグ前掲書、二二頁（邦訳三一～三二頁）。

(7) 「ピョートル一世への嘆願書」

(8) ベルグ前掲書、一六四頁。

(9) シャタノイはアイヌ名風に言えば、シャタイノであったとも思われる。なお、コズイレフスキーの報告は、サニマとシャタノイの他、キスチ（喜助か）なる日本人よりの情報にもとづくが、郡山良光『幕末日露関係史研究』(昭五五、国書刊行会、一七頁）では、キスチ（喜七）はサニマとともにロシア人のところにあった日本人とあるが、かれはポロムシリ島で捕えられた「異国人」の一人で、かれこそアイヌ語を日本語に通訳し、サニマがそれをロシア語に訳したと考えたい。

(10) ベルグ前掲書、一六五頁。

(11) Lensen, op. cit., p.41

(12) サニマのペテルブルグ到着の年について、エフィモフ (Efimov, A. B., Iz istorii verikikh russkikh geograficheskikh otkrytij, Moskva, 1971, p.139) などは一七一九年、ジューコフ (Zhukov, Yu., Russkie i Yaponiya, Moskva, 1945, p.13) などは一七一一年とする。

(13) Strahlenberg, ph. von, Das Nord und Ostliche Theil von Europa und Asia, 1730, Stockholm, p. 4438 で、日本人伝兵衛にあったと述べているが、かれが北方戦争の捕虜としてトボリスクにあったのは一七一一年八月二六日～一七二一年三月一日であったから、これはサニ

マと思われる。（加藤九祚『シベリアに憑かれた人々』昭四九、岩波新書、一三、一五、二〇頁）。なお、Znamenskij, S., V poiskakh Yaponii; iz istorii russkikh geograficheskikh otkrytij i morekhodstva v Tikhom okeane, Blagoveshchensk, 1929（秋月俊幸訳『ロシア人の日本発見』昭五四、北海道大学図書刊行会、一三四頁）参照。

(14) Lensen, op. cit., p.41, footnote 14

㈢ 薩摩若潮丸漂民[1]

享保一三戊申年（一七二八年）一一月初め、松平大隅守島津継豊手船、若潮丸[2]に一七名が乗組み、薩摩を出帆、大坂へ向う。積荷は大坂薩摩屋敷[3]への廻米の他、紙・絹織物・紫檀などであった。乗組員の中に、商人の子で父の死後は同じく商業を営んでいたソーザ（宗蔵）と、楫取の子のゴンザ（権蔵）があった。宗蔵（当時三五歳[4]）は商家からの上乗で、権蔵（当時一〇歳[5]）は炊であったと思われる。出帆後、一一月八日嵐にあい、八日間を嵐の中に過し、太平洋上を六ヵ月と八日間漂流。享保一四年（一七二九年）六月七日[6]、カムチャツカ東海岸、ロパトカ岬とアワチャ湾との間の海岸に漂着。五キロほどの沖に船をとめ、端舟で上陸。二、三日間[7]静養、その間、母船は嵐のため流失。その後、コサック五十人長アンドレイ＝シュティンニコフの率いるカムチャダール人の一隊が現われ、一〇サージェン（二一・三メートル）ほど離れたところに二日間宿営、夜のうちに立ち去る。一隊の去ったのち、漂民らは端舟で海岸を三〇ヴェルスタ（約三二キロ）ほど行き、母船を見つけたが、シュティンニコフの一隊の襲撃を受け、積荷を奪われ、母船を焼払われる。その際一五名が殺され、宗蔵と権蔵のみ捕えられる。

宗蔵と権蔵は、ヴェルフネーカムチャツカからニジニーカムチャツカへ連行され、シュティンニコフに酷使される。半年ほどのち[8]、新任代官ノヴゴロドフ[9]が来任、シュティンニコフは処罰され、漂民らは舵手ヤコブ＝ゲンスの手に移されて官費で養われる。ノヴゴロドフの報告を受けたアナドィルの長官パヴルツキー少佐は、漂民をヤクーツクに送ることを命じ、漂民らは一七三一年ヤクーツク到着。五週間滞在、アレクセイ＝リヴォヴィチ＝プレシチェフ知事の命令で、ペテルブルグへ送られる。途中、トボリスクで四週間滞留、イギリス人医師アンテルモニーのジョン＝ベルと会う[10]。同所より急行の案内人に付添われ、モスクワのシベリア庁に至る。一週間滞在[11]、同じ案内人に付添われ、ペテルブルグ到着[12]、侍従のアンドレイ＝イヴァノヴィチ＝ウシャコフ将軍邸に滞留した。

一七三四年、迎賓館において女帝アンナに謁[13]、勅令により陸軍幼年学校修道司祭預けとなる。同年一〇月二〇日、同校内の主の復活教会で受洗、宗蔵はクジマ＝シュルツ、権蔵はデミアン＝ポモルツェフと名付けられる[14]。一七三五年、権蔵はロシア語文法を学ぶ

ためアレクサンドロネフスキー神学校へ送られた。間もなく両名は、勅令により科学アカデミーに派遣され、一七三六年、同アカデミー付属日本語学校教師に任ぜられる。同学校主幹はアンドレイ＝イヴァノヴィチ＝ボグダノフ、生徒はピョートル＝シェナヌイキンとアンドレイ＝フェネフの二名であった。[15]

一七三六年九月一八日、宗蔵は四三歳で死亡、遺体は海軍省広場（現在のデカブリスト広場）の主の昇天教会の海軍省側墓地に葬られた。権蔵はボグダノフの指導のもとに、世界最初の露日辞典『新スラヴ・日本語辞典』（一七三八年）等の数種の日本語参考書を著わす。[16] 一七三九年七月一八日、権蔵はその功により、元老院から年俸一〇〇ルーブリを受けるが、[17] 同年一二月一五日、二一歳で死亡。遺体は宗蔵が葬られたのと同じ主の昇天教会のカリンスキンスカヤ側の墓地に葬られた。[18] アカデミーは美術家コンラート＝オスネルに命じて、両名のデスマスクを作らせる。[19] それは今も、ソ連科学アカデミーの人類学・人種誌学博物館に保存されている。[20]

註

(1) 薩摩若潮丸漂民についての主なる史料・文献は次の如くである。

(ア) A＝ボグダノフ「日本人たちについての簡単な報告――かれらは如何にしてロシア帝国に辿りついたか――」、一七三七年（ソビエト科学アカデミー古文書・レニングラード支部・二の二〇六号）。

(イ) 同「サンクトペテルブルグに居た二人の日本国人についての簡単な報告、両人はキリスト教信仰のため洗礼を受け、洗礼名は第一の者はコシマ、第二の者はダミアンという」（同右史料、同号付）。

(ウ) Krasheninnikov, S. P., Opisanie Zemli Kamchatki sochinennoe Stepanom Krasheninnikovym, Akademii Nauk Professorom v Sanktpeterburge pri Imperatorskoj Akademii Nauk, 1755, vol.2, pp. 222～225（上記(ア)に基づいて書かれている。）

(エ) Müller, Sammlung Russischer Geschichte, vol. 3, p. 127（上記(イ)の史料を紹介）。

(オ) 村山七郎『漂流民の言語』二二～二八頁（上記(ウ)・(エ)の邦訳がある。）

(カ) 田保橋潔『近代日本外国関係史』昭一八年、刀江書院、七一頁（上記(エ)の要約がある）。

(キ) バルトリド前掲書（外務省調査部訳）。なお、本項は特に註記しない限り、上記(ウ)の記事による。

(2) 外務省『外交志稿』四二〇頁には「若宮丸」とあり、上記(ウ)には Fayaikmar とあるが、ここは(エ)・(オ)等により Vakashivamar 説をとる。若宮丸（Vakamivamar）は sh と m（ロシア文学ではよく似ている）の混同と思う。村山七郎氏は「速行丸」は急行便の意であろうとされる。

(3) (エ)による。

(4)、(5) (ウ)に見える両名の没年より逆算。

(6) 『外交志稿』には「享保一四年七月漂着」とあるが、これは西暦一七二九年七月の誤りと思われる。ボグダノフの報告は、漂民の話に基づ

いているので漂着時の日附は日本暦と思われる。享保一四年六月七日は西暦一七二九年七月二日、ロシア暦では同年六月二一日である。

(7) ベルグ『カムチャツカ発見』一九九頁には、二三日に至ってシュティンニコフの一隊が来たとある。

(8) (7)による。

(9) ベルグ前掲書、一九九頁。

(10) John Bell of Antermony は、一七二〇年北京への使節イズマイロフに従行した人で、その旅行記 Travels from St. Petersburg in Russia, to divers Parts of Asia, London, 1764, vol. 1, pp. 211～213 に、そのことが記されているという。

(11) (7)による。

(12) 通常、漂民らのペテルブルグ到着は一七三四年のこととされる（ファインベルグ前掲書二五頁、邦訳三六頁）。とすれば、漂民らのヤクーツク到着一七三一年は早きに過ぎる。史料(7)には「カムチャツカに全部で三年住んだ」とあるから、それは一七三二年も末のこととも考えられる。

(13) ファインベルグ前掲書二五頁、邦訳三六頁。

(14) バルトリド前掲書三八〇頁。

(15) Sgibnev, Obuchenii v Rossii yaponskomu yazyku, Morskoj Sbornik, Spb., 1868, No.12（播磨楢吉訳「露国に於ける日本語学校の沿革」『史学雑誌』三三の一〇、大正一一年、七九三頁）

(16) これら日本語参考書は次の如くである。

(a) 「露日単語集」(Vokabuly) 一七三六年、（四〇のテーマから成る。）

(b) 「日本語会話入門」(Preddverie Razgovorov Yaponskogo Yazyka) 一七三六年、（テーマ別に配置された六一九の会話例集）。以上、(a)・(b)については、村山七郎『漂流民の言語』三八～一二八頁参照。

(c) 「簡略日本文法」(Kratkaya Grammatichka) 一七三八年、（名詞・代名詞・動詞・副詞に分けて説く）。村山七郎「簡略文法について」（九州大学文学部『文学研究』六六輯、一～九三頁）参照。

(d) 「新スラヴ・日本語辞典」(Novuj Leksikon Slaveno-Yaponskij) 一七三八年、（収容語数一万二千語、一七三六年九月二九日～一七三八年一〇月二七日に編纂）。村山七郎「新スラヴ・日本語辞典における一八世紀初めの薩摩方言語彙」（前掲『文学研究』六八輯、三一～一一二頁）、および同『新スラヴ・日本語辞典』昭六〇、ナウカ社、参照。

(e) 「友好会話手本集 (Druzheskikh Nekotorykh Razgovorov Obrazny) 一七三九年（露日会話対訳）。

(f) 「絵で見た世界」(Orbis pictus) 一七三九年、（チェコのヤン＝アモス＝コメンスキー著のラテン語教科書の日本語訳）。

なお、村山七郎「薩摩漂流民ゴンザ（権左）の事蹟」（『日本歴史』一九二号、昭三九）参照。

(17) ズギブネフ、前掲論文、七九三頁。

(18) ペテルブルグ主の昇天教会付属のこの二つの墓地は、一七四六年閉鎖、現在は教会も墓地も残っていない。（ＡＰＮニュース、一九七一年七月一三日号）。

(19) バルトリド前掲書三八一頁。

（20）村山「簡略文法について」七～八頁に、このデスマスクの写真がある。なお、亀井高孝・村山七郎「日本漂流民とクンストカーメラ」（『日本歴史』二一〇号、昭四〇）参照。

㈣ 南部多賀丸漂民[1]

延享元甲子年[2]（一七四四年）一一月一四日、奥州南部領鹿角郡佐井村（青森県下北郡佐井村佐井）の竹内徳兵衛持船多賀丸[3]一二〇〇石積に、徳兵衛以下一七名[4]乗組み、佐井港出帆。大畑港（下北郡大畑町）寄港、大豆・昆布・鰯糟などを積み[5]、江戸へ向う途中（「海軍古文書」）、一一月二八日[6]、三陸沖で遭難（推定）。（以上、主として『原始慢筆[7]』による。）

乗組員は船頭の竹内徳兵衛・その親族で同じ佐井村の勝右衛門・奥戸村（下北郡大間町奥戸）の伊勢屋安兵衛の親族利八（「タタリノフ」では利八郎）・大間村の長松（「タタリノフ」では久助）・宮古浦（盛岡県宮古市）の伊兵衛と長助のほか、利助・磯治・七五郎（「国立古文書館文書」では八兵衛）・久太郎（以上四名の名は「タタリノフ」による）および他六名の計一七名であった。（本段は『魯西亜紀聞』による。）

漂流中六名死亡。延享二年（一七四五年）四月一三日、生存者一一名は破損した本船を捨て端舟に乗移る（「タタリノフ」）。五月一六日（一七四五年六月四日）、オンネコタン島ウカモル湾に漂着（「タタリノフ」）、上陸後間もなく船頭竹内徳兵衛死亡。三〇日ほど経ち（『ロシア国旅行記』）、六月一五日（「タタリノフ」は五月一八日とする）、生存者一〇名は同島に来た毛皮税徴収役人マトヴェイ＝ノヴォグラブレンヌイと、ヒョードル＝スロボドチコフに見出され、ボリシェレツクに至る。カムチャツカ長官レベデーフ大尉は、漂民の話をもとに作られた地図とともに、かれらの漂着を政府に報告。一七四六年八月二〇日、政府はオホーツクでベーリング探検隊残務整理をしていたスヴェン＝ワクセリ大尉、およびルティシチェフ少尉に、漂民をオホーツクに護送し、うち優秀な者五名を首都に送ることを命ずる。同年一二月八日、ワクセリ大尉はドミトリー＝コロステリョフ船長に対し、漂民引取にボリシェレツクに向うことを要請した。（本段は「海軍古文書」による。）

ボリシェレツク滞在の漂民は、洗礼を受け、それぞれ次のようなロシア名を受ける。リェハジロ（利八郎）はマトヴェイ、スイェモ（勝右衛門）はグリゴリー、イェフェイ（伊兵衛）はヴァシリー、シェジモロ（七五郎）はアンドレイ、ユソンジ（磯海）はフォーマ、キェユドラ（久太郎）はペートル、サンノスキェ（佐之助）はイヴァン、チョスキェ（長助）はフィリップ、キェユスキェ（久助）はイヴァン、リェスケ（利助）はパヴェルである。（本段は「タタリノフ」による。）

一七四七年九月一〇日、病気の利助を除く漂民九名は、オホーツク到着。利助はその年ボリシェレツクで死亡。[8] 九月一四日、漂民らはアレクセイ＝ウラドキン少尉補、およびペテルブルグ日本語学校生徒で一七四二年のスパンベルグの第三回日本近海探検に参加したフェネフとシェナヌイキンに付添われ、オホーツク出発。ヤクーツクに到着して、勝右衛門・伊兵衛・磯治・八兵衛（七五郎）・久太郎の五名は、ペテルブルグへ送られ、日本語学校教師となる。[9] 長松（久助）・利八（利八郎）・長助・佐之助の四名はヤクーツクに残留。（本段は主に「海軍古文書」による。）

ペテルブルグ組のうち、磯治と八兵衛（七五郎）は一七五三年病死、残る三名は同年の日本語学校のイルクーツク移転に伴い、生徒のフェネフおよびシェナヌイキンとともにイルクーツクへ出発、一七五四年五月二六日到着した。[10] 同校はイルクーツク航海学校に付設され、校長は舵手のアンドレイ＝タタリノフであった。漂民らは同校教師として年俸一五〇ルーブリを受ける。ヤクーツク残留組の四名も、一七五四年一月九日付で通訳官に任ぜられ、中尉相当官の待遇を受け、イリムスクに移り、ロシア青年に日本語を教えた。同年にはリャプノフ、一七五七年にはカルポフ、イヴァン＝アンチピン、ロストフスキー、ルンドフスキーの計五名がその生徒となった。

イルクーツク日本語学校では、一七五九年、ドミトリー＝ポチャロフやオチェレヂンら六名が、一七六〇年にはさらに二名が生徒となり、生徒総数一〇名となる。一七六一年、イリムスクにあった漂民四名、生徒五名もイルクーツクに移り、日本人教師七名、生徒総数一五名となる。[11] 一七六三年一月一五日勝右衛門病死、六五年八月一六日佐之助が病死し（「国立古文書館文書」）、生存漂民五名となる。一七七二年、パラスのシベリア調査団のドイツ系学者ゲオルギーがイルクーツクに来て、漂民のことをその著『ロシア国旅行記』（一七七五年刊）に記す。[12] 一七七三年頃、漂民らは簡単な『日本語単語集』および『日本語会話集』を著わす。[13]

一方、日本語学校生徒の異動は次の如くであった。一七六一年五月シェナヌイキン、六四年五月カルポフ死亡。六四年八月、コジェウィン、スパーノフ、ブドールーエフ、コトコフの四名、航海学校より転入。同年、フェネフおよびコトコフ死亡。[14] 六五年佐之助の子三八と他一名入学。[15] 生徒数一七名となったが、通訳としてカムチャツカに派遣されたり、死亡したりして、七一年には八名に減じ、七二年にはさらに四名が通訳となった。（以上三段は主として「ズギブネフ」による。）

一七八二年、佐之助の子三八（アンドレイ＝イヴァノヴィチ＝タタリノフ）は、漂民の手になる『日本語単語集』を基礎として、『レクシコン』（露日辞典）を編集、同年一〇月二四日付で科学アカデミーに提出した。[16] 一七八三年までに生存漂民は三名となり、[17] 八

六年までにはすべて死亡[18]、日本語学校生徒も八六年当時、三名を残すだけとなり、年長のエゴル＝イヴァノヴィチ＝トゥゴルコフが教鞭をとった[19]。

註

（1）南部多賀丸漂民に関する主なる史料・文献は次の如くである。

(ア) M＝タタリノフ「現在イルクーツクにいる日本人たちの知識」（タタリノフ『千島記』Tatarinov, Mikhail, Opisanie Kurilskikh ostrov, Mesyatso Slovo, 1785 の付録）、ソビエト科学アカデミー古文書、ミューラー関係文書、二一番、目録五、六〇号、一〇〇～一〇二丁。本文中「タタリノフ」と略記。

(イ) 中央国立海軍古文書、海軍参与会関係文書、目録一、一〇号、一二〇～一二二丁。本文中「海軍古文書」と略記。

(ウ) ズギブネフ「ロシアにおける日本語学校」(ニ)の註(15)参照)、本文中「ズギブネフ」と略記

(エ) モスクワ中央国立古文書、二五九番、目録二二、九九一号。本文中「国立古文書館文書」と略記。

(オ) 村林源助『原始慢筆風土年表上』（『みちのく双書』第九集）。本文中『原始慢筆』と略記。

(カ) 『魯西亜紀聞』（『通航一覧』巻三一六、および近藤守重『辺要分界図考』巻七所収）

(キ) Georgi, J. G., Bemerkungen einer Reise im Russischen Reich in Jahre, 1772, Spb, 1775

(ク) 村山七郎『漂流民の言語』、一三一～一五四頁。（上記(ア)・(イ)・(ウ)・(エ)・(オ)などの記事を含んだ記述がある。）

(ケ) ファインベルグ『ロシアと日本』三二～三四頁、邦訳四七～五〇頁。（上記(エ)に基づく記述がある。

(コ) 木崎良平「竹内徳兵衛船の漂流について」（立正大学『文学部論叢』五七号、昭五二）

（2）多賀丸の遭難年については、『魯西亜紀聞』・『北海鳥舶記』・『辺要分界図考』などには、宝暦三年（一七五三年）とあるが（『通航一覧』巻三一六）、最上徳内の『蝦夷草紙』（大友喜作編『北門叢書』巻一所収）などの説く延享元年説が正しい。（前掲論文(コ)参照）

（3）史料(ア)の中の「タナ丸」も、多賀丸を思わせる。

（4）史料(キ)は、乗組員一八名説をとるが、一七名説が妥当であろう。（前掲論文(コ)の四四～四五頁参照）

（5）(キ)では米・布・絹織物とあり、(イ)では木材・干魚・魚油とある。

（6）佐井村長福寺にある竹内徳兵衛の墓石、および同村渡辺正吉家にある過去帳に、「竹内徳兵衛、延享元年一一月二八日没」とあるのは、多賀丸遭難の日を示すものと思われる。(ク)の二一三頁参照）

（7）漂流民のロシア名についての「国立古文書館文書」・「タタリノフ」・「ズギブネフ」の記事は、(ク)の一五二～一五三頁に一覧表がある。

（8）、（9）上記(ウ)七九四頁。

（10）「ズギブネフ」は六月七日とするが、これは、五月二六日を新暦に換算した六月六日を一日誤ったものと思われる。

（11）篠本廉『北槎異聞』（『北門叢書』巻六所収）巻一に、佐之助を含むこの五人の名が見える。

（12）この記事の邦訳は、(ク)一三八～一三九頁にある。

(13) (ク)一四〇頁。
(14) (ウ)七九六頁にはフェネフの死は一七五四年とある。
(15) (ク)一五一頁。
(16) 「ロシア科学アカデミー議事録、一七八二年一〇月二四日の条」(ク)一三五頁)。なお、『レクシコン』については、(ク)一五五～二〇八頁に「レクシコンの改編による南部方言辞典」がある。また、同村山氏「ア・タターリノフの『レクシコン』の東北方言について」(『国語学』五二、昭四八)、および「ア・タターリノフの『レクシコン』の会話篇」(『国語学』五五、昭四八)参照。
(17) 佐藤玄六郎『蝦夷拾遺』(『北門叢書』第一冊、三〇三頁)に、天明六年(一七八六年)五月～六月頃、択捉島におけるロシア人イジュョと天明探検隊員の問答中に、イジュョが多賀丸漂民のうち「今三人存命」と答えたとあることと、イジュョのオホーツク出帆が一七八三年であったことより推定。
(18)、(19) (ウ)の七九六頁。

以上、㈠元禄大坂漂民～㈣南部多賀丸漂民の漂流経緯について見てきたが、これからも分るように、日露国交交渉開始前のロシアへの漂民は、まず、ロシア人に日本に関する情報を伝え、あるいは、三右衛門の如くロシア人の北千島探検の水先案内人をつとめ、同方面の地図作成に協力した。また、かれらは日本語教師となり、ロシア人に日本語を教え、あるいは種々の日本語参考書を著わして、ロシアにおける日本語研究の道を切り開いた。

ところで、伝兵衛や三右衛門のもたらした日本に関する情報、あるいは三右衛門を伴ってなされたコズイレフスキーの北千島探検、その後のイヴァン＝エヴレイノフとフョードル＝ルーヂンらの探検[1]によって、日本への通路も次第に明らかとなり、一七三九年(元文四年)には、スパンベルグの率いる日本近海探検隊の船が、陸奥国仙台湾や安房国天津村沖に姿を現わし、日露直接接触の初めとなった[2]。なお、この時、探検隊は通訳を持たなかったため、要領を得なかったことにより、一七四二年(寛保二年)の探検時には、薩摩漂民に日本語を習ったシェナヌイキンとフェネフが探検隊に加えられた[3]。もっとも、この時は濃霧のため、探検隊は日本本土に達することが出来ず、北緯三九度三〇分の地点に達しただけで終った[4]。

ついで多賀丸漂民に日本語を学んだ者たちは、カムチャツカのボリシェレツクに派遣され、あるいは日本へ渡航して、日露関係を前進させた。たとえば、一七七一年(明和八年)、土佐の佐喜浜、阿波の日和佐、奄美大島の伊須浜に渡来し、長崎のオランダ商館長にロシアの千島南下の情勢を告げたベニョフスキー一行中の航海士補ポチャロフや[5]、一七七八年・七九年(安永七・八年)に根室・厚岸に渡来し、松前藩に通商を求めたイルクーツク商人シャバリンの一行中のオチェレヂン(漂民利八の義兄)およびアンチピン

らがそれである。[6] また、のちに一七九二年（寛政四年）根室に渡来し、わが国に通商を求めたラクスマン一行中には、南部漂民に日本語を習ったトゥゴルコフや、同漂民長助（フィリップ＝ニキフォロフ＝トラペズニコフ）の子、イヴァン＝フィリポヴィチ＝トラペズニコフがいた。[7] なお、最上徳内の『蝦夷草紙』などには、天明三年（一七八三年）日本北海で活躍し、アイヌ貿易に従事していたヘイタラレヲンセイチャという多賀丸漂民の子についての記事がある。[8]

ともあれ、こうした南部漂民による日本語教育活動は、天明元年（一七八一年）七月、オランダ商館長ヘイトが『オランダ風説書』の中でわが国に伝えた。[9] 幕府はこの件について、さらなる情報をオランダ人に求めたと思われるが、その回答が天明三年（一七八三年）七月にオランダ商館長チチングとロンベルクの提出した『風説書』の中に見える。[10] 幕府は、その後間もなく、ロシア人の千島南下の情勢の中で、天明五～六年（一七八五～八六年）の蝦夷地大探検を行うが、この探検によって、幕府は安永渡来のロシア人のことや、南部多賀丸漂民のことを知る。[11] 日露国交交渉開始の時期が近づきつつあったのである。このように、ロシアへの漂流民第一群は日露直接外交関係の開花を準備したのである。

註

(1) ベルグ『カムチャツカ発見』一七六～一七七頁参照。
(2) 木崎良平「『元文の黒船』についての日本側史料」（『鹿児島大学史録』六、昭四八）、参照。
(3) ズギブネフ「ロシア日本語学校」（播磨訳）七九四頁。
(4) ベルグ前掲書、二一四頁。
(5) 水口志計夫・沼田次郎篇『ベニョフスキー航海記』昭五二、平凡社東洋文庫一六〇、一二八頁などに通訳としてのポチャロフの活躍が見える。
(6) 木崎良平「安永渡来のロシア人」（『鹿児島大学史録』八、昭五〇）参照。オチェレヂンは日本史料にいうヒョドロ、アンチピンはエバンテのこと。
(7) 桂川甫周『北槎聞略』（亀井高孝・村山七郎篇、昭四〇、吉川弘文館）などに、かれらのことが記されている。（木崎「竹内徳兵衛船の漂流について」五四頁）。
(8) 『蝦夷草紙』（『北門叢書』一、三九〇～三九二頁）など参照。
(9) 木崎良平「『オランダ風説書』所載のロシア関係記事について」（『鹿児島大学史録』一、昭四三）、『通航一覧』巻二四八（国書刊行会本六の三〇〇頁）参照。
(10) 同右論文、『通航一覧』同巻（六の三〇一頁）参照。

(11) たとえば、天明六年閏一〇月二〇日付「蝦夷地之儀に付申上候書付」（『蝦夷地一件』、北門叢書、一、一七六～一七七頁）など参照。

四、日露国交交渉開始期の漂民・抑留民

本章は、寛政四年（一七九二年）ロシア第一回遣日使節ラクスマンに伴われて帰国した㈤伊勢神昌丸漂民から、その後険悪化した日露関係が一応落着した時期に帰国した㈢尾張督乗丸漂民に至るまでのロシアへの漂民・抑留民の漂流・抑留経緯を示し、かれらの日露交渉史上の意味について考察したものである。

㈤ 伊勢神昌丸漂民[1]

天明二壬寅年（一七八二年）一二月九日[2]、伊勢亀山領奄芸郡白子村（三重県鈴鹿市白子）の彦兵衛持船神昌丸一〇〇〇石積に、一七名の者が乗組み、紀州藩御用米五〇〇石・木綿・薬種・紙・什器などを積んで、江戸大伝馬町の廻船問屋一見屋勘右衛門方へ輸送のため出帆[3]。乗組員は、船頭の大黒屋光太夫・船親父の三五郎・賄の小市・船表賄の次郎兵衛・水主の磯吉・安五郎・清七・長次郎・藤助・勘太郎・九右衛門・幾八・藤吉・庄蔵・新蔵・炊の与惣松・上乗の作次郎であった。

出帆後、鳥羽港で風待ち[4]、一三日開帆。同夜半、駿河沖で北風が起り西風とせり合い、楫を折られる。船の安全を保つため、翌朝、荷物を取捨て、檣を切ったが、船は東へ漂流、翌年二月頃より北方へ流される。七月一五日幾八死亡、二〇日（『漂民記』は二八日）アリューシャン列島のアムチトカ島に漂着した。同島に一七八七年[5]（天明七年）七月まで四年間滞留。この間、モスクワ商人ジガレフの使用人で同島に派遣されていたニビジモフの世話になる。天明三年八月九日に三五郎、八月二〇日に次郎兵衛、一〇月一六日に安五郎、一〇月二三日に作次郎、一二月一七日に清七[6]、一二月二〇日に長次郎、一七八四年（天明四年）九月三〇日に藤助の計七名死亡。なお、神昌丸は漂民らが上陸した日の夜、碇をすりきり、坐礁して破船した。

一七八六年七月、ニジニーカムチャツカからコサックのサポジニコフらの乗ったアポストルーパーヴェル号が到着[7]、入港時難破する。漂民らはロシア人と協力し、その船の古材・流木などで六〇〇石積ほどの船をつくり、一七八七年七月一八日、ロシア人二五名と漂民九名は同島出帆、八月二三日ウスチーカムチャツカ到着、ついでニジニーカムチャツカに至った。光太夫は長官コーノダニロヴィチ＝オルレヤンコフ少佐の家に、他の者は秘書のヴァシリー＝ドブレニンの家に宿した。一七八八年二月一一日光太夫らはフランスの航海家ジャン＝バプティスト＝レセップスと会う[8]。カムチャツカ滞留中、八八年四月五日に与惣松、四月一一日に勘太郎、五

月六日に藤蔵死亡。同年六月一五日（『漂民記』は五月一四日）、生存漂民六名はテモヘ＝オシポヴィチ＝ホッケイチ大尉・日本語通訳で多賀丸漂民利八の義兄オチェレヂンらロシア人一五名と、[9] ニジニ－カムチャツカ発、七月一日チギリ着。八月一日同所出帆、同三〇日オホーツク着（『漂民記』・「取糺」）。九月一二日（『漂民記』は九月一三日）オホーツク発、一一月九日（「取糺」の九月一一日は誤り）ヤクーツク着（『異聞』・「口書」）。一二月一三日同所発（『漂民記』・『異聞』）、一七八九年二月七日[10]イルクーツクに到着した。

イルクーツクでは蹄鉄工ホルコフ宅に止宿したが、当時、同地には日本語通訳として、多賀丸漂民長助の子のトラペズニコフ、佐之助の子のタタリノフ、日本語学校出身のトゥゴルコフが居た。イルクーツク到着後、水主の庄蔵は凍傷による脚部手術を受け、帰国をあきらめ、八九年冬、帰化、フョードル＝ステパノヴィチ＝シトニコフと改名する。一方光太夫はイルクーツク到着直後と、同年八月、翌九〇年二月七日の三回にわたり、帰国歎願書を当局に提出したが、聞き届けられず、ホッケイチ大尉を通じ、同地滞在中の博物学者キリル＝ラクスマンを知り、その支援をうける。九一年一月一三日、九右衛門病死、新蔵も重病でこの年の春帰化し、ニコライ＝ペトロヴィチ＝コロトゥイギンと名乗る。

これより先、一七九一年一月一五日光太夫はキリルに伴われイルクーツク発、二月二九日（「取糺」では二月二七日）ペテルブルグ着、宮廷侍従長ベズボロトコ伯に帰国願を提出した。五月（「取糺」）、新蔵も来着。五月八日、光太夫はツァールスコエ－セロに赴き、夏宮庭園管理主任オシポ＝イヴァノヴィチ＝ブーシュ宅に止宿、六月二八日、エカテリナ二世に謁、帰国を願う。九月、ペテルブルグに戻る。九月一三日、漂民送還の勅令が出され、庄蔵と新蔵はイルクーツク中央国民学校付設の日本語学校教師に任命される。[11] 九月二九日、ベズボロトコ伯邸でアレクサンドル＝ヴォロンツォフ外相より、光太夫に帰国許可のことが伝えられる。一〇月二〇日、エカテリナ二世に再度の謁、嗅ぎ煙草入れを貰い、一一月八日[12]、ヴォロンツォフ邸で金牌・金時計等を貰う。なお、光太夫は在京中、パラスの『欽定全世界言語比較辞典』の改定に参加した。[13] 一一月二六日ペテルブルグ発、二九日モスクワ着、商人ジガレフ方に宿、一二月一一日同所発、一四日ニジニ－ノヴゴロド着、二〇日同所発、一七九二年一月五日エカテリンブルグ着、六日（『聞略』の一六日は誤り）発、一〇日トボリスク着、一三日出発、一月二三日[14]、イルクーツクに帰着した。

一七九二年五月二〇日、光太夫はキリルおよび同三男マリテンらとイルクーツク出発、二三日カジカ着。小市・磯吉も、トラペズニコフ、トゥゴルコフらとともに、二四日カジカ到着。二五日出発、六月一五日[15]ヤクーツク着。七月二日（「口上書」では七月一日）

同所発、八月三日（「口上書」では八月一三日）オホーツク着。小市・磯吉らは八日着。

一七九二年九月一三日（寛政四年八月九日）、キリルの次男アダム＝ラクスマン中尉を漂民護送使節とし、船長ヴァシリー＝ヒョードロヴィチ＝ロフツォフのエカテリナ号で、漂民らはオホーツク出帆、一〇月七日（日本暦九月三日）北海道ハラサン沖に達し、翌八日西別にロシア人上陸、六人の日本役人に会い、その指示で一〇月九日[16]（日本暦九月五日）根室港に入った。

註

（1）伊勢神昌丸漂民に関する主な史料・文献は次の如くである。

(ア) 桂川甫周『北槎聞略』一一巻附録一巻、寛政六年八月序（亀井高孝校訂本、昭一二、三秀舎。亀井・村山編、昭四〇、吉川弘文館。『日本庶民生活史料集成』巻五、昭四三、三一書房）。本項は特に註記しない限り、本書の記事による。

(イ) 篠本廉『北槎異聞』四巻、寛政五年八月成、（大友喜作篇『北門叢書』六）。本文中『異聞』と略記。

(ウ) 「幸太夫口書」寛政四年一一月、（『通航一覧』巻三一六、国書刊行会本、巻八の一三四～一四〇頁）。本文中、「口書」と略記。

(エ) 「幸太夫・トコロフ口上覚書」寛政四年九月、（『通航一覧』巻三一六、国書刊行会本、巻八の一四〇～一四二頁）。本文中、「口上書」と略記。

(オ) 「幸太夫磯吉取糺の事」寛政五年八月、（石井研堂『漂流奇談全集』続帝国文庫、明治三三、博文館、二六九～二八二頁）。本文中、「取糺」と略記。

(カ) 『魯西亜国漂民記』寛政一二年写、（荒川秀俊『近世漂流記集』、法政大出版局、昭四四、一六二～一八五頁）。本文中、『漂民記』と略記。

(キ) 桂川甫周『漂民御覧之記』寛政五年九月（『通航一覧』巻三一六、巻八の一四八～一五五頁）なお、同書漢訳に亀井南冥道載『奇観録』寛政六年一二月成、がある。

(ク) 『通航一覧』巻二七四、魯西亜国部二、渡来并通商願、（国書刊行会本、巻七の九四～一〇三頁）。

(ケ) 「ラクスマン日記」（ボロンスキイ著駐露日本公使館訳、林欽吾補註『ロシア人日本遠訪記』、昭四九、原書房、九〇～一五五頁。および播磨楢吉訳註「露国最初の遣日使節アダム・ラクスマン日誌」、『史学雑誌』三四の二、五、六）。

(コ) 山崎徳吉「漂民光太夫と露使派遣事情」（『伝記』二の八、昭一〇）。なお帰朝後の光太夫については、山崎徳吉「帰朝後の漂民光太夫と嗣子大黒梅陰（『伝記』二の四、昭一〇）がある。

(サ) 新村出「伊勢漂民の事蹟」（『新村出選集』巻二所収）大正三。

(シ) 吉野作造『露国帰還の漂流民幸太夫』（文化生活研究会、大正一三）。

(セ) 亀井高孝『大黒屋光太夫』、昭三九、吉川弘文館。

(ス) 亀井高孝『光太夫の悲恋――大黒屋光太夫の研究――』、昭四二、吉川弘文館。

（2）上記(コ)、二の八の九九頁。

(3) 上記(ス)の三八頁。
(4) 上記(ニ)、二の八の一〇〇頁。
(5) 「取糺」に「天明四辰年より日本之暦無之候に付、魯西亜国之月日相用申候」とあるから、以後の『聞略』の日付はロシア暦として取扱う。
(6) 『聞略』巻一による。同巻二に「一二月一七日寅の刻に長次郎死」とあるのは、「一二月一七日寅の刻に清七、同月二〇日長次郎死」の誤り。
(7) ファインベルグ『ロシアと日本』五二頁、邦訳七三頁。
(8) 上記(ス)六三頁。Lesseps, Journal historique du Voyage, Paris, 1790, Vol. I, pp. 203～211（『旅行日記』一七八八年二月一一日の条）参照。
(9) ファインベルグ前掲書五二頁、邦訳七四頁。
(10) 上記(ス)七三頁には二月一七日とあるが、(ア)・(イ)・(ウ)・(オ)・(カ)などは二月七日。
(11) シチェグロフ著、吉村柳里訳『シベリア年代記』、昭一八、日本公論社、四〇八頁。
(12) 「口書」は一〇月九日謁、一一月二〇日賜金牌。「取糺」は一二月九日謁。『漂民記』は一〇月一九日謁、一一月二〇日賜金牌とする。
(13) この辞典（Lingurum Totius Orbis Vocabularia Comparativa Augustissimae Cura Collecta）一七八七年・八九年刊の改訂版四巻本は一七九〇～九一年に刊行された。基礎単語二七三個と数詞一二個の世界各国語比較辞典。なお、その日本語の部分については、村山七郎『漂流民の言語』二二五～二三六頁参照。
(14) 『聞略』巻三末尾には一月三日とある。『異聞』・「口書」・「取糺」も一月三日。ただし『漂民記』は一月二三日。
(15) 『聞略』巻三末尾には六月一九日、「口書」・「口上書」・「取糺」も同じ。『漂民記』は六月一五日とする。
(16) 「口書」に「十月九日日本之九月三日」とあるのは誤り。「取糺」に「十月十七日ネモロと申所へ着、日本之九月三日に相当」とあるのも誤り。

(六) 仙台若宮丸漂民[1]

寛政五癸丑年（一七九三年）一一月一一日、仙台牡鹿郡石巻の米沢屋平之丞持船若宮丸、二四反帆[2]、八〇〇石積に、御用木雑小間木四〇〇本および米一三三二俵を積入れ、同二七日、一六名が乗組み、石巻港出帆。乗組員は、船頭の平兵衛・楫取の左太夫・水主の津太夫・儀兵衛・左平・太十郎・市五郎・吉郎次・清蔵・銀三郎・善六・辰蔵・民之助・八三郎・茂次平・炊の巳之助であった。

若宮丸は一一月二七日東名浦（宮城県桃生郡鳴瀬町東名）に寄航風待ち、二九日出帆、岩城領塩屋崎（福島県いわき市塩屋崎）沖で南西の強風にあう。三〇日広野（福島県双葉郡広野町）沖に假泊、一二月一日陸地に接近しようとしたが強風のため沖へ流される。二日夜から北風あるいは南西の風激しく、舵を折られ、三日帆柱を切り、四日積荷を海中に投棄、以後、太平洋を北東へ漂流した。

寛政六年（一七九四年）五月一〇日、アリューシャン列島中のアンドレヤノフスキー諸島の一島に漂着。本船を乗捨て端舟で上陸したが、人家も食料もなく、本船も波に打砕かれる。数日後[3]（「第一口書」）、端舟で北航、六月五日（「第一口書」は四日）、住民に出会い、その島に上陸。六月八日船頭平兵衛死亡。一二日（「第一口書」は三日）、数名のロシア人来島、かれらとともにナアツカ（ウナラスカ）島に渡る。イルクーツクに本社をもつシェレホフ＝ゴリコフ会社の根拠地の一島。同島で越冬。寛政七年[4]（一七九五年）四月三日、同会社支配人エウストラート＝イヴァノヴィチ＝ガラロフに連れられ、同島出帆、六月二八日オホーツク着船。ウルップ島開拓に出発するヴァシリー＝コレニオヴィチ＝ズヴェズドチョトフ（日本史料にいうケレトフセ）の一団に出会い、故国への手紙を托す[5]。

オホーツクで漂民らは三班に分けられ、第一班の儀兵衛・善六・辰蔵の三人は、勤務交替のロシア役人とともに、八月一八日オホーツク発、一〇月一三日ヤクーツク着、一一月二四日同所発、寛政八年（一七九六年）一月二四日イルクーツクに着した。第二班の左平・銀三郎・左太夫・太十郎・茂次郎（茂次平）の五人は、同年五月上旬オホーツク発、一一月イルクーツク着。第三班の津太夫・民之助・清蔵・八三郎・市五郎・巳之助・吉郎次の七人は、七月三日オホーツク発、七月二九日ヤクーツク着。市五郎病気のため同地に残留、残る六人は一二月下旬イルクーツク到着。

第一班の三人は、イルクーツク到着後、飯料として月銅銭二〇〇枚の支給をうけ町宿にあったが、生活のたしに人夫などに出て賃金を稼ぐ。やがて、町宿から日本語通訳トゥゴルコフ方に移る。寛政八年三月、善六と辰蔵帰化、善六はピョートル＝ステファノヴィチ＝キセリョフ、辰蔵はアンドレイ＝アレクサンドロヴィチ＝コンドラドフと名乗る（『北辺探事』）。儀兵衛はトゥゴルコフ方を出て、伊勢漂民庄蔵と同居。この夏、庄蔵死亡、庄蔵に代り、善六が日本語学校教師補となる[6]。寛政九年（一七九七年）初め、第三班の民之助（イヴァン＝メイトロヴィチ＝キセリョフ）、八三郎（セミョン＝グレゴリエヴィチ＝キセリョフ）も善六に勧められ帰化（『北辺探事』）。ヤクーツク残留の市五郎は、これより前、寛政八年一〇月二二日に死亡した[7]。

仙台漂民送還は、すでに一七九六年（寛政八年）七月二六日付で、エカテリナ二世のシベリア知事イヴァン＝セリフォントフ宛勅令が出ていたが[8]、同年一一月六日の女帝の死亡、対仏戦争の激化、一七九五年七月のシェレホフ死亡後のイルクーツク商人団の不一致などの事情のため遅延。寛政一一年（一七九九年）二月二八日、吉郎次死亡[9]。享和三年（一八〇三年）三月七日、生存漂民一三名（内四名は帰化）は、アレクサンドル＝メルケリ中尉[10]および伊勢漂民新蔵らに付添われ、イルクーツク出発、ペテルブルグへ向う。

三月九日左太夫・清蔵、病気のため落伍。四月ベリヤ（ペルミ）で銀三郎も落伍。四月中頃モスクワ着、四月二七日（「第一口書」）ペテルブルグに漂民一〇名着。商相ニコライ＝ペトロヴィチ＝ルミャンツェフ邸に止宿。五月一六日、アレクサンドル一世に謁。津太夫・左平・儀兵衛・太十郎は送還、帰化組の善六・辰蔵・民之助・八三郎と、新たに帰化を希望した已之助（ミハイル＝ジェラロフ）・茂次郎（ザハル＝ブルダコフ）[11]の六名は残留ときまる。

享和三年（一八〇三年）六月一二日、送還組四名は伊勢の新蔵とともにペテルブルグ発クロンシュタットへ、六月一六日（ロシア暦七月二二日）[12]ナデジダ号（船長クルーゼンシュテルン）で、遣日使節ニコライ＝ペトロヴィチ＝レザノフ（シェレホフの女婿）に伴われ同港出航、南アメリカ大陸迂廻、オアフ島を経て、文化元年六月一〇日[13]（一八〇四年七月四日）ペテロパウロフスク入港。同船して来た善六は、ここで下船[14]。文化元年八月四日[15]（ロシア暦八月二六日）同地出帆、九月六日（九月二七日）長崎港外伊王崎に着帆。七日夜、引船で木鉢浦へ移り滞船。文化二年（一八〇五年）三月六日、七日、日露会談。九日ロシア側より漂民引渡しの連絡があり、一〇日御徒目付増田藤四郎・御小人目付上川伝右衛門・菊沢左兵衛らが、梅ヶ崎ロシア人特別宿舎に赴き、漂民を受領した[16]。

註

（1）仙台若宮丸漂民に関する主な史料・文献は次の如くである。

(ア) 大槻玄沢『環海異聞』一五巻、文化四年初夏成（『北門叢書』四・石井研堂『漂流奇談全集』三八七～六九四頁・三島才二『南蛮紀文選』四、大正一四、洛東書院・同氏『南海稀聞帳』一、昭四、潮文閣・石井研堂校訂、宮崎栄一編『環海異聞』、昭五一、叢文社）。本項は主としてこの書による。

(イ) 大槻玄沢『北辺探事』二巻、文化三年夏成（『北門叢書』六）。

(ウ) 「文化元甲子年九月魯西亜船より長崎護送の漂人口書」文化二年三月二九日付（『通航一覧』巻三一八、国書刊行会本、八の一五七～一六六頁）。本文中「第一口書」と略記。

(エ) 「魯西亜国漂流奥民口書」別名「異国江漂流仕候陸奥之者四人口書」文化二年四月付（『通航一覧』巻三一八、八の一六六～一七六頁・荒川秀俊『異国漂流記集』第七篇、昭三七、吉川弘文館）。

(オ) Krusenstern, A.J. von, Reise um die Welt in den Jahren 1803, 1804, 1805 und 1806, 3 Bde., St. Petersburg, 1810~12（羽仁五郎訳註『クルウゼンシュテルン日本紀行』異国叢書、昭六、駿南社）

(カ) Voenskij, K., Russkoe posol'stvo v Yaponiyu v nachale XIX veka (Posol'stvo Rezanova v Yaponiyu v 1803-1805 gg.) Russkaya starina, SPb., 1895, No.7, 10（堀竹雄抄訳「十九世紀初年日本に於けるロシア使節」『史学雑誌』一九の三、四、七）

(キ) 『通航一覧』巻二七五～二八三、魯西亜国部、渡来并通商願、国書刊行会本七の九一～二一六頁。

(ケ) 梅森三郎『日露国交史料』大正四、有隣堂。

(2) 「文化元年九月六日御検使お尋ね」（『環海』巻一四所収）では二六反帆。

(3) 『環海』巻一には「此所に十日ばかり逗留」とある。

(4) 漂流三年目よりの日付は、ロシア暦とも思われるが、確証を得ないので『環海』の記事通りに記す。

(5) 木崎良平「仙台漂流民の手紙」（『鹿児島大学史録』七所収）昭四九。

(6) ズギブネフ「ロシアにおける日本語学校」播磨訳（『史学雑誌』三三の一〇）、七九八頁。

(7) 上記(ウ)による。ただし、没年は推定。『北辺探事』に「寅（寛政六年）一〇月二三日没」とあるのは誤り。

(8) ファインベルグ『ロシアと日本』七二頁、邦訳九八頁。『北辺探事』巻二には、「辰（一七九六年）の年一二月頃か、日本漂流人帰国せしむべき旨命令女帝より下り、其帰帆始末逐一承り、某なる官人都を立ち出で其半途トボリツカといふ所迄下りしが、其所へ都より早追来たり、女帝崩御の告げありし」とある。

(9) 『北辺探事』巻一に「卯（寛政七年）三月二八日没」とあるのは誤り。なお、明治三三年大審院検事小宮三保松はイルクーツクで「未寛政十一年日本奥州仙台」、「十二月廿八日牡鹿郡小竹浜阿部屋吉郎祐作七十三才」と彫られた墓石を見出した（『考古界』一）。『環海』巻六によれば、これは太十郎彫刻とある。

(10) ファインベルグ前掲書七七頁、邦訳一〇三頁。

(11) 同書七七頁、邦訳一〇四頁に見える仙台漂民六名の洗礼名の中から、従来知られている四名の洗礼名を除き推定。

(12) 上記(オ)・(カ)には、七月二七日とある。

(13) 『環海』巻一三には七月三日とある。「第一口書」は七月初旬とする。ここは、上記(オ)・(カ)による。

(14) (オ)上巻一〇四頁。

(15) 『環海』巻一三、「第一口書」ともに、八月五日とする。ここは(オ)・(カ)による。

(16) (キ)巻二八二（七の一九六～一九七頁）。

(七) 南部慶祥丸漂民(1)

享和三癸亥年（一八〇三年）九月、陸奥国南部牛滝村（青森県下北郡佐井村牛滝）源右衛門持船慶祥丸五八二石積に、船頭継右衛門ら一三名乗組み、南部脇之沢村（同郡脇之沢村）出帆、九月下旬箱館入津、一〇月、荷主の箱館弁天町浜屋次兵衛および同所大町辰巳屋七郎兵衛よりの上乗り源次郎も乗組み、箱館出航、箱館在の臼尻村（茅部郡南茅部町臼尻）着船。塩鱈三一一三〇本（「択捉口書」では三一〇六〇本）を積入れ、江戸鉄砲州の栖原屋久次郎・同四日市鎌倉屋庄兵衛方に届けるため、一一月八日朝、臼尻を出帆した。

乗組員は、船頭継右衛門・賄の専右衛門・楫取の平次郎・水主の吉九郎(2)・弥内・勘右衛門・庄兵衛・伊之助・仙之丞・福松・吉五

郎・藤蔵・炊の岩松・および上乗の源次郎の計一四名であった。一一月八日夜、南部尻谷村（下北郡東通村尻屋）沖で嵐にあい、積荷五、六〇石ばかりを捨て、九日仙台領唐丹湊（釜石市唐仁町）入港、難船改めを受け、一三日出帆、唐南湊（宮城県桃生郡鳴瀬町東名）を経て、中之作湊（いわき市中之作）入港、粮米等買入れ、二八日暮方同所出帆。

享和三年一一月二九日夜四ツ時頃より、総州九十九里浜沖で強い北風にあい、九ツ時頃暴風雨に見舞われる。三〇日、檣を切り、漂流し始め、一二月一日三宅島沖一〇里ほどのところに至る。以後、翌文化元年三月上旬まで南海漂流。その間、享和三年一二月二九日に平次郎、文化元年二月三日（「択捉口書」二月二日）に庄兵衛死亡。三月上旬より北方に漂流、四月北海に至る。寒気強く、四月二七日に伊之助、六月一六日に源次郎、六月一八日福松、同日仙之丞、七月四日吉五郎、七月七日藤蔵が死亡[3]。七月一八日頃、生存者六名は北千島ポロムシリ島東浦に漂着した。

四日間ほど島内探索、人影を見ず、その間強い南風で本船も流失したので、脚船で海上一里、シムチチャウ（占守）島に渡る。八月中旬カムチャツカのロパトカ岬に渡り、二日ほどして通りかかったポロムシリ島アイヌ、イハンテレンテ外男女八人およびロシア人僧侶ヴェレスチャギン[4]乗組みの舟に拾われ、二〇日ほどののち、九月初旬ペテロパウロフスクに到着した。継右衛門と岩松は仙台漂民善六（ロシア名ヘッテハン『休明光記』巻七）方に、吉九郎・弥内はある商家、専右衛門・勘右衛門は別の商家に止宿（『休明光記』巻七）。商家止宿の四名は、狭いことと待遇が悪いことから假小屋を建て、そこに移ったが、そのひどさに同情したアリューシャン通いのロシア人船頭アテリヤノ＝ヴァシリエヴィチが引取る。食物は商人ヒャウトロより麦粉を渡される。

文化元年一二月、カムチャツカの重役人パウル＝イヴァノヴィチ来着。文化二年五月一〇日頃[5]、遣日使節レザノフを乗せたナデジダ号、長崎より帰着。日本との通商交渉不成功のため、帰国のことかなわずと申し渡され、待遇悪化。六月中旬、漂民らは猟に出る風をして、小舟でペテロパウロフスク脱出。食糧はヒャウトロより米一斗五升ほど貰う。風強く、吹き戻されながら、二〇日ほどのちシムチチャウ島着。さらに七月中旬ポロムシリ島に渡り、同島酋長ヲンテレの勧めで、ペテロパウロフスクへ行っているラショア島アイヌの舟の寄港を待つ。

七月下旬（『休明光記』巻七の中旬は誤り）、寄港したラショア島長マキセンの舟で男五名・女四名のアイヌとともに、ポロムシリ島出帆、海上一八、九里ヲンネコタン島（六日滞）、海上六、七里ハラマコタン島、海上一一里シャシコタン島、海上六里シモシリ島、海上一八里ラクアキ島、海上五、六里モトワ島、海上七、八里ラショア島に、閏八月初旬[6]（「択捉口書」）到着、同島で越冬。

継右衛門・吉九郎はマキセン方、専右衛門はマツヘ方、弥内・岩松はハテ方、勘右衛門はワシリ方に止宿。漂民らが同島到着後間もなく、ウルップ島引揚げのワシレイコレ＝ヲプズエズンケレトフセ[7]団の一行一三名（男九名・女二名・子供二名）が小舟で来着、越冬。

文化三年二月一三日、マキセン・マツヘ・ハテ・ワシリおよびアイヌ女性三人と共に、ラショア島出帆、海上二里ウセシリ島に至る。三月一八日同島発、海上五里ケトイ島着。三月二二日発、海上七里シムシリ島着。四月二五日発、海上一五里マカンルル島着。（本段は「択捉口書」による。）

同島で、文化二年六月九日択捉島シベトロへ赴き、文化三年三月二六日に同島を脱出して来たラショア島アイヌのマキセン＝ケレコウリツら男七人・女七人の一行[8]に会う。漂民らを送って来たラショア島人らは、それより先へ漂民らを送ることを拒む。漂民らは、アイヌと海上四里のレブンチリホイ島に渡り、流木等で小舟を作って貰い、五月二六日（「択捉口書」）漂民らだけで同島発、海上一五町のヤンケチリホイ島を経て、海上四、五里ウルップ島着。風待ち、六月二八日出帆、海上八、九里択捉島アトイア岬着。同所で三泊、七月二日シベトロ番所に帰着した。

註

（1）南部慶祥丸漂民に関する主な史料・文献は次の如くである。

(ア)「慶祥丸漂民口書」於箱館文化四年六月三日付（東北大学所蔵狩野文庫本、『通航一覧』巻三一九、八の一八八～二〇三頁）。本項は主としてこの口書による。

(イ)「慶祥丸漂民口書」於択捉島シャナ文化三年七月付（『通航一覧』巻三一九、八の一七九～一八四頁）。本文中「択捉口書」と略記。

(ウ)「戸田又太夫覚書」（同書同巻、八の一八四～一八五頁）。

(エ)「菊地惣内届出書」（同書同巻、八の一八六～一八八頁）。

(オ)「南部領牛滝村船方の者共魯西亜国へ漂流帰帆せし事」（『休明光記』巻七、『新撰北海道史』巻五、北海道庁、昭一一、四五八～四六九頁所収）。

(カ) 大村治五平『私残記』（森荘已池解説、昭五二、中央文庫）。

(キ) Krusenstern, Reise und die Welt in den Japan.（羽仁五郎訳註『クルウゼンシュテルン日本紀行』、昭六、駿南社）。

(ク) 石井研堂『漂流奇談全集』、続帝国文庫、明治三三、博文館、四九七頁所収の「漂客東察加出奔記」。

（2）上記(ア)の狩野文庫でも総じて吉五郎とあるが、乗組員仲間に同名の者がいるので、同本氏名書出しの部に従う。

（3）漂民の死亡月日は「択捉口書」による。

（4）上記(キ)の下巻、一四九頁。
（5）上記(キ)では、一八〇五年五月二五日（文化二年五月九日）とある。
（6）上記(ア)では八月初旬とあるが、ペテロパウロフスクよりの航行日数を考えると、「択捉口書」の閏八月初旬が正しい。
（7）正しくは、ヴァシリー＝コレニオヴィチ＝ズヴェズドチョトフ＝ペレドフシチク。かれの率いるウルップ移民団は、寛政七年（一七九五年）よりウルップ島にあった。（『休明光記』巻三参照）。木崎「ズヴェズドチョトフの一行」（『立正史学』四七号、七四～七六頁）参照。
（8）菊地惣内「魯西亜属島ラショア島長夷マキセンケンコウリツ外男女拾三人エトロフ島渡来仕候一件吟味仕候趣申上候書付」（文化二年十月付、狩野文庫）、『休明光記遺稿』巻四（『新撰北海道史』巻五、一二八七～一三〇七頁）参照。

(八) 文化魯寇樺太島捕虜[1]

文化三丙寅年八月二五日（一八〇六年九月二四日）、ニコライ＝アレクサンドロヴィチ＝フヴォストフの率いるユノナ号、オホーツク出帆、九月七日（一〇月六日）樺太亜庭湾に到着[2]。九月一一日（一〇月一〇日）、ロシア人約二〇人、二艘の小舟に分乗、同湾東浦のヲフイトマリ上陸、アイヌの少年（チウラフシクルの子、一七、八歳）を捕え、ロシア文字で同所占領を宣した文を刻んだ真鍮板をおいて去る[3]。九月一二日（一〇月一一日）、ユノナ号は久春古丹沖に現われ、小舟四艘でロシア人約三〇人上陸、運上所の番人富五郎・源七・酉蔵・福松の四人を捕え、倉庫内の米六〇〇俵、木綿五〇反、その他雑貨を掠奪。九月一六日（一〇月一五日）、運上所板蔵一一か所、弁天社、図合船七艘などを焼払い、弁天社鳥居に、ヲフイトマリに残したのと同様の真鍮板をうちつけ、紙札二枚を置き[4]、翌日まで滞船。ヲフイトマリで捕えたアイヌの少年は、ここで解放したが、番人四人はペテロパウロフスクへ連行、一〇月一三日（一一月一〇日）[5]着。番人らは飛脚屋のガブリウ＝メエテレエチ＝キリコウフ方に止宿、越冬。

文化四年三月四日、松前家樺太支配人元締徒士格の柴田角兵衛、宗谷から久春古丹に渡り、前年のロシア人乱暴始末を知る。三月二四日、宗谷帰着、その急報は四月六日松前に達した[6]。一方、同年四月七日（ロシア暦五月二日）、フヴォストフ率いるユノナ号とガヴリイル＝イヴァノヴィチ＝ダヴィドフの率いるアヴォス号は、樺太番人を乗せ、ペテロパウロフスク出帆、四月二三日（五月一八日）択捉島ナイホ沖に至る。（以下次項参照）。

註

（1）文化魯寇事件に関する史料・文献は数多いが、本項は主として「樺太・択捉島番人口書」文化四年八月一日付（『通航一覧』巻二九三、七の三一九～三三七頁）による。

（2）ファインベルグ『ロシアと日本』九七頁、邦訳一二七頁。
（3）「唐太蝦夷（リリカアイノおよびマヨタウエングル）申口の趣書付」文化四年五月付（『通航一覧』巻二八五、七の二三一～二三四頁）による。
（4）同右史料による。なお、真鍮板のロシア文の当時の訳文は、『通航一覧』巻二八五、七の二三四頁に見える。木崎良平「フヴォストフの久春古丹占領文書」（『鹿児島大学史録』七、一五九～一六一頁、昭四九）参照。
（5）註(1)の「樺太番人口書」には一一月五日着、一一月二四日頃一同上陸、とある。
（6）「松前若狭守江戸詰家人（横井登）御届」文化四年四月二一日付（『通航一覧』巻二八四、七の二二〇～二二一頁）参照。

(九) 文化魯寇択捉島捕虜[1]

文化四丁卯年（一八〇七年）四月二三日、ナイホ沖渡来のロシア人は、四月二五日小舟一艘に約一〇人乗組み上陸、同番所に居た五郎次・左兵衛・長助・六蔵・三助の五人を捕え、倉庫の米二〇俵・大工道具・木綿等を掠奪、番屋・倉庫に放火、二七日退去した。四月二九日、シャナ沖に至り、翌五月一日、小舟四艘・革舟二艘で約四〇人が上陸。会所に乱入、武器・米・酒・雑貨を奪う。五月二日、同所勤番の南部家砲術師大村治五平を捕え、同夜、津軽家足軽金沢久蔵[2]を捕える。久蔵は翌日解放、樺太島番人四名・択捉島番人五名および大村治五平は、ロシア船で連行される[3]。

ロシア船は得撫島を経て、五月二一日、樺太のヲフイトマリ・久春古丹に至り、前年の掠奪あとを視察。この時、樺太島番人源七は同島支配人平兵衛宛手紙をアイヌに托す[4]。五月二三日、ロシア人はルウタカに上陸、番屋二軒、倉庫九棟、弁天社拝殿などを焼払う。（『休明光記』巻八）。五月二九日、レブンシリ沖で商船宜幸丸を襲い[5]、六月一日、同船を掠奪、焼払い、ついで利尻島付近で二日から四日にかけ、官船万春丸・松前商船禎祥丸・誠竜丸を襲い、これらを焼払い、武器・貨物を奪う。（『休明光記』巻八）。六月五日、択捉島番人五郎次・左兵衛を除く捕虜八名を、宜幸丸から奪った小舟に乗せ解放。その際、フヴォストフは樺太番人源七に書かせた松前奉行宛手紙を托す[6]。番人ら八名は、六月五日夜、宗谷場所内のイウツ（稚内市勇知）に漕ぎ渡り、野宿、翌日宗谷場所に帰着。なお、番人たちは、五郎次の菊地惣内宛手紙[7]を托されて持ち帰る。

五郎次と左兵衛は、文化四年六月二三日（一八〇七年七月一六日）[8]、ユノナ号でオホーツク着。両名は同地滞留中、文化六年五月に逃亡、オホーツクより三〇里ほど離れたヲリヤに居たが、一二月オホーツクに連れ戻される。文化七年五月一一日、再び逃亡、ヲリヤからセンタリン島を経て、一二月にはゲヤカからツングース部落を彷う。この時、左兵衛は鯨の腐肉を食べ死亡。文化八年春、

五郎次はゲヤカに戻ったところをロシア人に見付り、五月下旬オホーツクに連れ戻される。（本段は「五郎次口書」による）。

文化八年八月中旬、五郎次はロシア役人に付添われ、オホーツク発、九月末ヤクーツク着。一二月同所発イルクーツクに送られ、仙台漂民善六方に寄宿、一日銅銭一〇〇文を支給される。文化九年三月、同所発、五月初めオホーツク着。[9] 同月下旬、摂津歓喜丸漂民がカムチャツカから到着。[10] 六月二六日、五郎次と歓喜丸漂民六名、ピョートル＝イヴァノヴィチ＝リコルドの率いるヂャナ号でオホーツク出帆、八月四日国後島センベコタン沖に着き、八月一二日五郎次は最終的に上陸、同島会所土手外に一夜留め置かれた上、一三日、日本役人に収容された。（本段は「五郎次口書」による。）

註

(1) 本項は主として次の史料・文献による。

(ア)「樺太・択捉島番人口書」文化四年八月一日付（『通航一覧』巻二九三、七の三一九～三三七頁）。本項は特に註記しない限り、この史料による。

(イ) 羽太正養『休明光記』巻八・巻九、「エトロフ島へ異国船渡来一件」（『新撰北海道史』巻五、四八〇～五二九頁）。

(ウ) 大村治五平『私残記』、中公文庫、昭和五二、中央公論社。

(エ)「五郎次口書」文化九年八月付（『通航一覧』巻三〇九、八の三五～四三頁）。

(オ)「大村治五平口書」文化四年八月三日付於箱館（『通航一覧』巻二九三、七の三三七～三四〇頁）。

(カ)「大村治五平口書」文化五年二月二六日付於江戸（『通航一覧』巻二九六、七の三七七～三七九頁）。

(キ) なお、五郎次関係文献については、木崎良平「中川五郎次に関する文献」（『鹿児島大学史録』八、昭五〇）参照。

(2) 上記(ア)、但し東北大狩野文庫本による。

(3)『休明光記』巻八参照。

(4) 同書附録別巻二（『新撰北海道史』五の一一八一～一一八二頁）、木崎良平「樺太番人の手紙」（『鹿児島大学史録』七、昭四九、一五八～一五九頁）参照。

(5)『通航一覧』巻二八五、七の二三五～二三六頁。

(6) 同書巻二九二、七の三一二頁。

(7) 同書巻二八六、七の二四九～二五〇頁。

(8) ファインベルク『ロシアと日本』一〇二頁、邦訳一三四頁。

(9) 五郎次はイルクーツクでリコルドと会い、旅費として紙幣で一〇貫八四〇文を貰い、かれと共に同所を出発、途中ヤクーツクで七日滞在、露米会社より銭三貫目を支給された。オホーツクでは同所長官ミニツキー方に止宿。（上記(エ)による）。

(10) 次項の註(3)参照

㈢ 摂津歓喜丸漂民[1]

文化七庚午年（一八一〇年）一一月二二日朝、摂津菟原郡御影村（神戸市難区御影）の加納屋十兵衛船歓喜丸[2]一一〇〇石積に、船頭平助以下一六名乗組み、江戸に向け大坂出航。積荷は新酒二二〇〇挺・砂糖一〇挺・藍玉一〇〇俵・醤油一〇〇挺・椎茸一〇箱・勝千栗五俵・昆布一〇俵・葛一〇〇箱・雪駄二〇〇足などであった。乗組員は、平助の他、賄の武兵衛・船親父の好五郎・水主の吉五郎・和吉・久五郎・常吉・清五郎・嘉蔵・忠五郎・千太郎・新五郎・保五郎・与茂吉・久蔵・炊の新次郎である。

一一月二三日夜、紀州三崎沖（「与茂吉口書」による。和歌山県西牟婁郡すさみ町三崎沖）で、西風の暴風雨に遭う。二四日、紀州大島沖に至るが、東風強く、波荒く楫を損ずる。二五日、積荷を捨て、以後七〇日間南へ漂流。文化八年二月六日頃より北へ吹き戻され、閏二月七日夜[3]、カムチャツカ東海岸のカメントロスケ島附近に漂着。漂着時、本船は砕け、一同雪中無人の境を彷うこと一か月に及ぶ。その間、閏二月一〇日に平助・好五郎・久五郎・常吉・千太郎・新五郎・新次郎が凍死、閏二月一三日武兵衛、同一五日和吉が死亡した。三月一〇日、生存者七名は四人のロシア人に出会い、三月一四日頃ニジニーカムチャツカに連れて行かれた。

文化九年一月、同所出発、マルカを経て、三月中旬（「与茂吉口書」・「久蔵口書」）ペテロパウロフスク着。四月一七日（「久蔵口書」）同所出発、五月下旬[4]オホーツク着。同所長官ミハイル＝イヴァノヴィチ＝ミニツキー方に一泊。ここに択捉島番人五郎次が居り、翌日、かれと共に八名はブキンに送られる。久蔵は医師ニコライ＝ミハイロヴィチ＝メイツユ方で凍傷にかかった左足（「久蔵口書」）切断の手術をうける。

文化九年六月二六日（一八一二年七月二二日）、久蔵を除く漂民六名と五郎次は、日本側に捕えられていたゴロウニン（文化八年五月国後島で捕えられる）らの救出に活躍するリコルドの率いるヂャナ号で、オホーツク出帆、八月三日、国後ケラムイ岬沖到着。（「与茂吉口書」）。以後、漂民らは日本役人との連絡のため、リコルドの使として上陸。与茂吉は四日、清五郎は七日、忠五郎は一一日、安五郎・嘉蔵・吉五郎と五郎次は一二日に上陸、日本役人に収容された。ただし、五郎次だけは、一晩国後会所土手の外におかれ、一三日に収容された。翌一四日、日本側との連絡の手段を失なったリコルドは、観世丸を捕え、高田屋嘉兵衛らを捕虜とする[5]。

一方、ロシア残留の久蔵は、文化九年八月オホーツク発、一〇月イルクーツクに到着。文化一〇年一月同所発、オホーツクに戻され、再び医師のニコライ方に止宿した。七月二八日（ロシア暦八月一一日）、ゴロウニン受取りのため、先の文化魯寇事件に関するイルクーツク知事ニコライ＝イヴァノヴィチ＝トレスキンの釈明書[6]や、オホーツク長官ミニツキーの書簡[7]を携えたリコルドの率いる

ヂャナ号に、久蔵は通訳の仙台漂民善六とともに乗船、オホーツク出帆、九月一六日（ロシア暦九月二七日）箱館に入港した。[8]

註

（1）攝津歓喜丸漂民に関する主な史料・文献は次の如くである。

(ア)『魯斉亜国漂流聞書』文化一一年五月成（木崎良平「安芸の久蔵の『魯斉亜国漂流聞書』」、『鹿児島大学史録』四、昭四六、一五三～一八〇頁）。

(イ)「与茂吉口書」文化九年八月付（『通航一覧』巻三二〇、八の二〇三～二〇頁）。

(ウ)「久蔵口書」文化一〇年一〇月付（『通航一覧』巻三二〇、八の二一〇～二一二頁）。

(エ)「太田彦助より高橋三平に贈る御用状」文化九月八月一二日付（『通航一覧』巻三〇七、八の六～一一頁）。

(オ)「清五郎外四名口書」文化九年八月付（『通航一覧』巻三二〇、八の二〇七～二一〇頁）。

(カ)『リコルドの日記』（ゴロウニン著、海軍軍令部訳『日本幽囚実記』、大正一五、聚芳閣、所収）。

(キ)「五郎次口書」文化九年八月付（『通航一覧』巻三〇九、八の三五～四三頁）。

(ク)木崎良平「安芸久蔵に関する史料・文献等」（『立正史学』四二、昭五三、七五～七六頁）。なお、本項は特に註記しない限り、上記(ア)による。

（2）上記(イ)・(ウ)・(オ)による。(ア)には「勧亀丸」とある。

（3）上記(イ)・(ウ)による。(ア)は二月二八日夜とする。

（4）上記(キ)によれば、五郎次は五月初めオホーツク着、そののち歓喜丸漂民が到着したとあり、(カ)（前掲書三九八頁）にも、漂民らが五郎次より先にオホーツクに到着していたと思われる叙述はない。一方(イ)の四月一七日ペテロパウロフスク出帆、四月二九日オホーツク着という記述は、航海日数が短かすぎる。第(二)項の薩摩永寿丸漂民の場合と同様、その航海日数を四〇日ほどと見て、(イ)の日附を一か月遅らせ、五月下旬とした。

（5）本段は、上記(エ)・(カ)による。

（6）『通航一覧』巻三一三、七の八六～九〇頁、参照。

（7）同書、同巻、七の八二～八六頁、参照。

（8）ヂャナ号のこの時の航海については、上記(カ)の記事による。

(二) 高田屋観世丸捕虜[1]

文化九壬申年（一八一二年）八月二日、択捉島請負人高田屋嘉兵衛持船観世丸に、嘉兵衛他択捉島番人・稼方の計四六名乗組み、箱館に向け、シャナ出帆。一二日、水晶島寄港、向い風のため箱館へ向えず、預っていたシャナ会所の箱館への至急御用状を、国後島会所から急使をもって届けて貰おうと、一三日晝頃、水晶島出帆、国後島に向う。（本段は「嘉兵衛口書」による。）

一方、秋味支度のため根室シベツ（標津郡標津）に赴いていた国後島稼方の惣九郎・周助・兵蔵・政吉・卯之松の五名は、国後場所アイヌ男四名・女四名、およびシベツ－アイヌ五名、南部藩飛脚足軽・仲間七名の計二〇名で、国後島へロシア船（ヂャナ号）来航の報を聞き、応援のため、八月一三日朝、図合船でシベツ出帆。国後島サルカマワフ沖で、二〇人ほどのロシア人が乗った伝馬船に追いかけられ、岸に漕ぎつけ逃れたが、惣九郎・周助・シベツ－アイヌのシトカ・国後の女アイヌの計四名は捕えられる。（本段は「惣九郎ら口書」による。）

八月一四日朝、観世丸は国後島ケラムイ岬沖で、ロシア人二〇人ほどの乗った小舟に襲われ、乗組員のうち一〇名が海に飛び込み逃れたが、九名溺死、稼方与右衛門だけが助かり、同日夜、泊会所に出頭。嘉兵衛は捕われ、ヂャナ号に連行された。（本段は「長松ら口書」による。）

八月一五日、観世丸乗組の択捉島番人・稼方一〇名・サルカマワフ捕虜の惣九郎・周助・女アイヌの計一三名、解放。八月一六日、嘉兵衛・船頭の吉蔵・水主の金蔵・平蔵・文次郎・シベツ－アイヌのシトカの六名を除き、二一名は解放ときまり、同日夕方、ヂャナ号は捕虜六名を乗せ沖合に出る。八月一七日、解放された二一名は上陸、国後会所に出頭した。（以上「長松ら口書」）。ヂャナ号は、同日朝出帆、九月一一日（ロシア暦一〇月三日）ペテロパウロフスク着。（『リコルドの日記』）。越冬。文化一〇年春、吉蔵・文次郎・シトカ病死。四月一八日[2]、嘉兵衛ら三名はヂャナ号により同所出帆、五月二六日[3]国後島センベコタン沖着。同日、金蔵・平蔵はロシア書簡を持ち上陸、二七日、嘉兵衛も上陸、日露間の接渉役を勤める。（「嘉兵衛口書」）。日露和解条件が調い、ヂャナ号は六月二四日出帆（『通航一覧』巻三一〇、八の五五頁）、オホーツクに向う。

註

（1）高田屋観世丸捕虜に関する主なる史料・文献は次の如くである。

(ア)「高田屋嘉兵衛外二名口書」文化一〇年六月付（『通航一覧』巻三一一、八の六五～六八頁）。本文中「嘉兵衛口書」と略記。

(イ)「国後場所稼方惣九郎・周助口書」文化九年八月付（『通航一覧』巻三〇九、八の三四～三五頁）。本文中「惣九郎ら口書」と略記。

(ウ)「観世丸乗組員長松外三十一人口書」文化九年八月付（『通航一覧』巻三〇九、八の三一～三四頁）。本文中「長松ら口書」と略記。

(エ)『リコルドの日記』（前項史料(カ)）。

（2）上記(ア)には、「当五月六日出航」とあるが、これはロシア暦である。(エ)の四三三頁参照）。たゞし、ヂャナ号がアワチャ湾を出航したのは、ロシア暦五月二三日（日本暦五月四日）である。

（3）(ア)に「去る廿六日御当所（国後島）江渡来」とある。これは日本暦で、ロシア暦では六月一四日に当る。なお、ファインベルクの『ロシアと日本』の邦訳に、「ペテロパウロフスク出帆後、二日後、イズメーナ湾（センベコタン沖）に入った。」とあるのは、「二〇日後」の誤植。（ファインベルク前掲書一〇九頁、邦訳一四二頁）。

(二) 薩摩永寿丸漂民[1]

文化九壬申年（一八一二年）一〇月一九日（「実記」）、薩摩国松平豊後守島津斉興手船（「口書」）、同国高城郡水引郷船間島[2]（鹿児島県川内市船間島）の嘉太郎船、帆幅二三反、一二〇〇石積[3]（「口書」）、永寿丸に船頭喜三左衛門以下二五名乗組み、江戸薩摩屋敷への廻米一四〇〇余石を積んで川内港出帆。乗組員は、喜三左衛門の他・弟の水主角次・同水主佐助・賄（推定）次右衛門・水主嘉左衛門・伊勢太郎・助右衛門・雲太郎・利八・袈裟太郎・太三次・喜兵衛・多左衛門・弥三次・源兵衛（以上船間島出身）・船親父（推定）船右衛門・水主仲一・孫太郎・休五郎・勘四郎・吉太郎・金太郎・儀助（以上川内京泊出身）・上乗の薩摩藩士井上友助祐長・春成猪助兼明の計二五名であった。

川内出帆後、出水郡出水郷脇元に寄港、風待ち、一一月初旬同港出帆（「口書」）、一二月一日瀬戸内小豆島に一泊、翌日、鳴門海峡を経て、三日、紀州熊野大島沖三里ほどの地点で北西の風強く遭難。以後一四日間ほど太平洋を東南に漂流、一二月中旬より東および東北に漂流。文化一〇年一月中旬、寒気強く、上乗の井上友助・春成猪助・水主一一名が二月～八月に死亡。八月一四日（「実記」。「口書」・「漂海」は八月一一日）本船水船となり、五名の病人を含む生存者一二名は脚船に乗移る。北西から西へ漂流、飢餓に苦しむ。九月二〇日頃、西方に島を発見、二四日夜[4]（「口書」）同島（ハラマコタン島）東南浦に漂着。夜半東北の強風で脚船沈没、賄の次右衛門ら六名水死。

岩壁上に打上げられた六名のうち、嘉左衛門・伊勢太郎・助右衛門の三名、六、七日して死亡。一〇月二〇日頃（「実記」）天候回復し、佐助・角次は島の西浦探検に出て、オンネコタン島から出稼猟のアイヌに会い助けられる。二日後、喜三左衛門も救出され、さらに三日後、一〇月末（「実記」）アイヌ一三名とともに渡海五里、オンネコタン島に渡り、佐助はヲロキセ[5]（文化八年五月、ゴロウニンらとともに捕えられたラショワ島アイヌ）の母ヲヲトチャ、その夫アムトノの土室に、角次はその近所、喜三左衛門は五里ほど離れたアキンハ方に養なわれる。

文化一一年二月、日本人を恨むヲヲトチャの母の酷使に耐えかねた佐助は、角次とアキンハ方に来る。春、ヲロキセ解放の報（文化

一〇年九月解放）同島に達す。五月一〇日頃（「実記」）、漂民らアキンハ同道、小舟三艘で海上一五里ポロムシリ島に渡り、トヨン（酋長）のボロホルニキリイチ方に止宿。六月初旬（「実記」）、ロシア徴税役人ら約一〇名が三艘の舟で来島、ヲロキセも来たる。六月下旬[6]、漂民らはロシア役人と海上半里、占守島に渡る。七日滞在。七月上旬、海上三里、カムチャツカのロパトカ岬へ渡る。西岸伝いに舟で北上、途中三日浜辺に野宿、ナヤヘ（オゼルノフスキー）着、二泊。同所より陸行、コレキナ（ゴルィギナ）着、翌日ペテロパウロフスクより出迎えの役人バアテレンおよびコツロフら到来（「実記」）、三日目、一同舟で出発、北上すること三〇里、野宿七日、ボリシャヤ川河口のチョフカ（ズィカヴォ）着、二泊。川舟で一〇里遡行、三日目にボソレツカ（ボリシェレック）着、三泊。それよりプロトニコヴァ川を一〇日余り遡行、カバチャ（アバチャ）着（「実記」）、一泊。急流をさらに遡り、ナチイカ（ナチキ）着、一泊。二日間の山越え陸行、コリャカ（コリャーク）着、三日間滞在。（「実記」）。四日目、アワチャ川を下ること一五里、河口のアワチャ着、一泊。翌日、渡海三里、ガワニ（ペテロパウロフスク）に着く。時に文化一一年八月末[7]。

翌一八一五年五月下旬（『漂海』）、二〇〇〇石積ゼヲニシイ号（船長ヴァシリー＝ノヴィツキー）に乗組み、六月初旬（「口書」。「実記」は五月中旬）ペテロパウロフスク出港、ポロムシリ島とオンネコタン島の間を通り、海上四〇日、七月中旬（推定）オホーツク着、二〇日間ほど滞在。七月二三日（日本暦六月二九日）オホーツク長官ミニツキーは、ヲフセン＝ミハイロヴィチ＝スレドニー航海士に漂民送還の命令を与える[8]。八月五日[9]（日本暦七月一三日）聖パヴェル号二〇〇〇石積二本檣ブリッグ型で、オホーツク出帆、八月二二日[10]（日本暦八月一日）択捉島沖一〇里ほどの地点に達したが、北西の風強く、接岸できず、一七日間ほど附近を航行、一〇月三日[11]（日本暦九月一三日）ペテロパウロフスクへ乗戻る。尾張督乗丸漂民重吉ら三名に出会い、（次項参照）六人同居して越年。

文化一三年五月二八日頃（「重吉口書」）漂民ら六名は、聖パヴェル号に乗船、六月初め[12]（「漂海」）、出帆、海上一四、五日で択捉島沖に達す。煙霧深く接岸できず、西航して絵鞆（室蘭）沖まで行き、引返す。六月二八日（『船長日記』）漂民らは脚船を貰い聖パヴェル号を離船、強風のため、得撫島に流れ着く。三〇日（『船長日記』）漂民らは同島東浦のワニナウに移り風待ち。七月七日、択捉島東北端に渡り、二夜野宿、七月九日、同島北端アトイア岬を迂回、シベトロ番所に帰着した。六月一一日（『船長日記』）、帰国船上で尾張漂民半兵衛が死亡したので、帰国者は、薩摩漂民三名、尾張漂民二名であった。

註

（1）薩摩永寿丸漂民に関する主な史料・文献は次の如くである。

(ア) 木場貞良『魯西亜漂流紀』二巻、文化一四年一〇月序（木崎良平『永寿丸魯西亜漂流紀』、昭五七、明玄書房）。本項は主としてこの史料による。本文中『漂流紀』と略記。

(イ) 「喜三左衛門実記」文化一四年三月成（浜田亀峰『鹿児島県川内郷土史』、昭三〇、下巻一三九～一五一頁。木崎前掲「漂流紀」にも所収）。

(ウ) 「喜三左衛門外二人口書」文化一三年七月二〇日付、於択捉島（『通航一覧』巻三二一、八の二一三～三一九頁。なお木崎前掲『漂流紀』には、東北大狩野文庫本の「口書」を所載）。本文中「口書」と略記。

(エ) 川上親信『漂海紀聞』五巻、文政八年成（木崎良平編『漂海紀聞』、昭四〇、鹿児島大学教養部歴史研究室）。本文中『漂海』と略記。

(オ) 池田寛親『船長日記』三巻、文政五年成（石井研堂編『異国漂流奇譚集』、昭二、福永書店、『日本庶民生活史料集成』巻五、昭四三、三一書房、所収）。

(カ) 「重吉外一名口書」文化一三年七月二〇日付（『通航一覧』巻三二一、八の二二〇～二二五頁。木崎前掲『漂流紀』に東北大狩野文庫本所収）。本文中、「重吉口書」と略記。

(キ) 木崎良平「薩摩永寿丸の漂流記について」（『鹿児島大学史録』二、昭四四）、「薩摩永寿丸漂民について」（『史林』六〇の一、昭五二）。

(2) 「口書」に船聞島とあるのは誤り。

(3) 「実記」には六五〇石積とある。『漂海』に六九〇石積とあるのは、六五〇石積の書写の誤りであろう。

(4) 『漂流紀』・「実記」は九月二〇日夜とする。

(5) 木崎良平「ラショワ島人ヲロキセ」（鹿児島大学史録』七、昭四九、一四七～一四八頁）参照。

(6) 「実記」は六月中旬とするが、占守島に七日滞在、七月上旬にロパトカ岬に渡ったことから考え、六月下旬とした。

(7) この八月末の日附はロシア暦と思われる。以下、文化一二年（一八一五年）の記述はロシア暦で示した。

(8) ファインベルク『ロシアと日本』一一二頁、邦訳一四六頁。

(9) 同書同頁による。『漂流紀』は八月初旬、『漂海』は七月中旬、「実記」は七月一〇日頃とする。

(10) 同書同頁による。『漂海』・「実記」は八月初めとする。

(11) 同書同頁による。『漂流紀』は一〇月に至りてとし、「口書」は九月中旬、「実記」は十月頃、『船長日記』は九月朔日比になりて、とする。

(12) 『漂流紀』は、六月にもなりとある。

(三) 尾張督乗丸漂民[1]

文化一〇癸酉年（一八一三年）一〇月、尾張国名古屋納屋町（名古屋市中村区納屋町）小島屋庄右衛門持船督乗丸一二〇〇石積に、船頭長右衛門（重吉）以下一四名が乗組み、尾州廻米その他諸商物を積入れ、師崎（愛知県知多郡知多町師崎）を出帆。江戸に至り、問屋石橋弥兵衛を通じて廻米を納め、その他積荷を売払い、代りに大豆七〇〇俵・諸道具を積み（「口書」）、同一〇月下旬、江戸出帆、帰路につく。乗組員は、船頭重吉の他・賄の孫三郎・楫取の藤助・水主の七兵衛・庄兵衛・半兵衛・要吉・為吉・音吉・福松・

三之助・重蔵・安兵衛・炊の房次郎の計一四名。

江戸出帆後、伊豆子浦（静岡県賀茂郡南伊豆町子浦）に寄港、一一月四日、同所出帆。同夜、御前崎沖で東北の暴風雨に見舞われ遭難、この時、水主の要吉が海に落ち死亡。船は一端伊勢の湊近くまで吹流され、西北の風でまた子浦沖五里の地点に吹戻される。楫を折られ、太平洋を南へ、赤道近くまで吹流され、ついで東へ漂流。翌文化一一年三月頃より、乗組員は次々に病気になり、五月八日七兵衛、一六日藤助、二八日房次郎、六月一二日庄兵衛と福松、一三日孫三郎、一六日為吉、一八日三之助、二〇日重蔵、二八日安兵衛の計一〇名が死亡した。

太平洋を漂流すること一年五ヵ月、文化一二年二月一四日、重吉・音吉・半兵衛の三人は、メキシコ沖でイギリス船ホーストン（フォレスタ）号、船長ベゲッ（ピケット）に救助され、四日ほどのち、サンターバーバラ諸島の一島に寄港。なお二日ののちシッハン（サンターバーバラ）着（「口書」）。一〇日間滞留、さらに二〇日ほど北航、ルキン着。船体修理のため三〇日ほど滞留。その間、日本語を話す男に会う。ルキン出航後五〇日ほどしてアミシヅカ（シトカ）着。露米会社支配人アレクサンドル＝アレクサンドロヴィチ＝バラノフの世話になる。シトカに四〇日ほど滞在して出航、四八日目にカムチャツカのロパトカ岬沖に達する。濃霧のため、五～七日滞船、オホーツク港に至ることをあきらめ、三日ほどのち、八月一五日[2]にペテロパウロフスクに入港した。

文化一二年九月一三日[3]（一八一五年一〇月三日）、薩摩永寿丸漂民が択捉島沖より乗戻る。六人同居して越冬。文化一三年五月二八日頃乗船（「口書」）、六月初め（『漂海』）、出帆、帰国の途につく。六月一一日、半兵衛死亡。七月九日、択捉島シベトロ番所に帰着した。（この間のことは、前項参照）。

註

（1）尾張督乗丸漂民に関する主なる史料・文献は次の如くである。

(ア) 池田寛親『船長日記』三巻、文政五年成（石井研堂編『異国漂流奇譚集』、昭二、福永書店、昭四六、新人物往来社再版、『日本庶民生活史料集成』巻五、昭四三、三一書房）。本項は主として、この書による。

(イ) 「重吉外一名口書」文化一三年七月二〇日付（『通航一覧』巻三二一、八の二二〇～二二五頁。石井研堂『校訂漂流奇談全集』続帝国文庫、明治三三、博文館、七九五～八〇四頁。東北大狩野文庫本、等）これは、択捉島フレベッ会所における口書で、この他に、シベトロ番所における口書・江戸蝦夷会所における口書（服部鉦太郎『尾張漂流譚』、昭一六、自家版）・故郷の鳴海代官所における口書（記録文献続日本之巻厳松堂展望）がある。

(イ) 前項薩摩永寿丸漂民関係史料・文献。
(エ) 「魯西亜国衣類器物披露来由書」文政四年刊（安藤次郎編、昭一〇、自家版）。
(オ) 重吉「ヲロシヤノ言」文政四年頃刊（昭四、尚徳堂叢書復刻。玉井幸助校訂『船長日記』、昭一八、育英書院、に付載）。
(カ) 桃木武平「船長日記補説」（住田正一編『海事史料叢書』巻五、三〜二二頁、昭四、巌松堂）。
(キ) 堀川柳人「小栗重吉」（『伝記』、昭一〇、二巻八号、八八〜九六頁。
(ク) 吉岡永美『漂流船物語の研究』、昭一九、北光書房、の中の督乗丸関係記事。
(ケ) 川合彦充『督乗丸の漂流』、昭三九、筑摩書房。

(2) 督乗丸乗組員がフォレスタ号に救助された日付文化一二年（一八一五年）二月一四日を西暦と見て、その後のフォレスタ号の航行日数を『船長日記』の記述により数えると、そのペテロパウロフスク到着は、九月二〇日（ロシア暦九月八日）頃となる。日本暦で文化一二年八月一八日頃である。『船長日記』のこの八月一五日の日附は、西暦の一か月遅れと考えたい。

(3) 『船長日記』は、永寿丸乗組員の乗戻った日附を、「九月朔日比」とする。これは、ロシア暦一〇月三日の一か月遅れであろう。なお、一〇月三日の日附は、ファインベルク『ロシアと日本』一一二頁、邦訳一四六頁による。

以上、本章で見た漂民らは、㈠ロシアのわが国に対する通商要求の手段として送還されて来たもの（伊勢・仙台漂民）、㈡幕府がロシアの要求を拒否し、険悪化した日露関係の中で、あるいは独力で帰還したもの（慶祥丸漂民）、あるいはロシア人に捕えられたもの（文化魯寇・観世丸捕虜）、あるいは日本側に捕えられたゴロウニン解放要求のために送還されて来たもの（歓喜丸漂民）、㈢ゴロウニン解放後の日露関係修復交渉の過程の中で送還されて来たもの（薩摩・尾張漂民）である。

かれらの歴史的意義は、日露外交関係開始の時期において、その媒体としての役割を果し、あるいは、その交渉の際の通訳・連絡係りとしての役割を果した点に、その第一のものがある。特に、伊勢の大黒屋光太夫、また日露関係修復につとめた高田屋嘉兵衛の役割は大きい。かれらを媒体とした日露関係展開の中に、幕府は次第にヨーロッパ諸国との外交経験を積み重ね、わが国の開国への道を比較的なだらかなものとした。光太夫の帰還から、六〇有余年に亘るロシアとの接渉の積み重ねが、嘉永六年（一八五三年）のペリーの来航に始まるいわゆる安政の開国の衝撃を緩和する役割を果したのである。

また、長崎のオランダ商館のみを唯一の外国情報撃取機関としていた幕府にとって、これらロシア帰還漂民は外国情報の良き提供者であった。幕府による伊勢漂民の漂流記の編纂を初め、仙台藩・薩摩藩でも、かれらの漂流記を編纂し、外国情報の収集につとめた。また、慶祥丸漂民からは、得撫島のロシア人等に関する千島方面の情勢について得るところがあった。なお、伊勢・仙台漂民の

アリューシャン列島における見聞、薩摩漂民の北千島・カムチャツカ方面の見聞は、とかく記録の少いこの方面の記録として価値を有している。

さて、わが国におけるロシア研究の発達は、一八世紀初め以来の蘭学の発達を縦糸とし、同世紀中頃以降のロシア人の千島南下による彼我の直接接触を横糸とするものであるが、[1] 光太夫帰還を契機として、それは開花した。幕府も外国接渉を円滑に行うために、文化六年（一八〇九年）二月、従来のオランダ通詞以外に、ロシア語および英語通詞の養成を命じ、[2] 文化八年三月には、幕府天文台内に蘭書翻訳局を設けた。[3] これより先、文化五年三月、長崎から江戸に呼寄せられた馬場佐十郎は、同年冬、光太夫についてロシア語を学ぶことを命ぜられ、その修得につとめた。[4] わが国におけるロシア語研究の発達に、ロシアへの漂民たちが果した役割は大きいものがある。[5] 尾張重吉の編した「ヲロシヤノ言」は、実にわが国最初の刊行せられた日露単語集である。

なお、ロシアへの漂民らは、その他種々のヨーロッパ文化のわが国への伝播の役割をも果した。それらの事蹟については、以上に示した漂流・抑留経緯のみでなく、かれらの帰国後の行動についても見る必要があるが、たとえば、文化魯寇捕虜の五郎次は、その帰国に当って『スポップーイスバーウェッシャーソウェルセンノーヲッーヲスペンノイーザラゼ』（痘瘡感染を完全にまぬがれる方法）という書物を持ち帰り、また種痘法も覚え帰って、わが国への牛痘法伝来史上に名を残した。[6] 歓喜丸漂民久蔵も、種痘苗の入った硝子板五枚を持帰り、また「乱心・難産療治方」をも見習い帰った。[7]

また、薩摩漂民善三左衛門は、西洋型帆船の製造法、航海術を覚え帰り、かれからこのことを聞いた薩摩藩士寺師正容は、『質問筆記』数冊を著わし、それに基づいて『渙象論』・『造船彙稿』等の船舶製造法の書物や、それに附属した大小船舶図数十枚を書いた。そして、文政五、六年（一八二二、二三年）頃には、外国船に模した伊呂波丸（渙象丸）を建造した。のち、島津藩主斉彬の命により嘉永四年（一八五一年）一〇月着工、安政元年（一八五四年）三月に竣工した一八反帆・三本檣のわが国最初の西洋型帆船「いろは丸」の参考となったものである。[8] その竣工は、一般にわが国最初の西洋型帆船として知られる伊豆戸田で造られた「戸田号」の竣工、安政二年二月よりも、一年ばかり早かった。

一方、これら漂民は、ロシア滞留中彼我の文化交流に貢献したし、漂民の中でロシアに残留した者も、イルクーツク日本語学校教師や通訳として活躍した。たとえば、伊勢の光太夫は一七九一年（寛政三年）ペテルブルグで、パラスの『欽定全世界言語比較辞典』の改定に参画したし、あるいは日本服を身につけて、ロシアの小学生に日本の風俗などについて説明したりした。[9] また伊勢漂民

の残留者、庄蔵や新蔵は一七九一年イルクーツク中央国民学校附設の日本語学校教師に任ぜられ、南部多賀丸漂民亡きあとのロシアにおける日本語教育の穴を埋めた。庄蔵死亡ののちは、仙台漂民善六が同校日本語教師補となった。『環海異聞』巻三に、「その弟子六人」とあるのは、[10]同校開設時（一七九二年六月一日）[11]よりのアムウロソフ、ミロノフ、アブロシモフの三人と、一七九六年四月一九日付で入学せしめられたココウリン、ポルニャコフ、コスイギンの三神学校生徒である。なお、一七九九年に、アムウロソフが神学校に転じ、新蔵の子供がその補欠として入学した。[12]

この日本語学級のあったイルクーツク中央国民学校は、一八〇五年一一月一二日、イルクーツク中学校に改編されたが、[13]生徒への手当は十分でなく、生徒たちは生活のために他に職を求め、その学習成果はあがらなかった。こうした中で、一八一〇年、新蔵は死亡し、生徒もミロノフとココウリンだけとなった。新蔵の後任として、仙台漂民の善六が一八一五年、正教師に昇格したが、生徒もミロノフ一人となり、成績もあがらず、その日本語学校は、翌一八一六年廃止された。[14]その間、択捉島番人五郎次・歓喜丸漂民久蔵・薩摩漂民喜三左衛門らを日本語教師にしようとする動きもあったが、ゴロウニン事件落着後の日露関係鎮静化の中で、またナポレオン戦争後の経費不足のため、この日本語学校は廃止となったのである。

しかし、新蔵の残した『日本および日本の商業について』という小著は、一八一七年に出版され、わが国の地理・歴史等について紹介するところがあった。[15]また、一八〇五年東洋研究のため、ロシア学士院からイルクーツクに派遣されたクラプロートは、新蔵について日本語を学び、『早引節用集』や『七以呂波手本』等により、日独辞書をつくった。クラプロートは一八三二年、林子平の『三国通覧図説』を仏訳しているが、その原本はかれがイルクーツク滞留中に入手したもので、新蔵の助力で翻訳することができたという。また、レザノフとともに日本に来て、オランダ語の通訳をつとめたドイツの学者ラングスドルフも、その帰途、イルクーツクを通り、新蔵に会ったが、その紀行文の中で、レザノフが日本に持って来た国書の和文の副書は、同地滞留の日本漁夫が書いたとしている。その漁夫とは新蔵のことであろう。[16]なお、仙台漂民善六は、文化一〇年九月、リコルドがゴロウニン受取りに箱館に来た時、通訳として同行して来たが、その日本との接渉の際の書翰は、すべて善六が書き、また、よく通訳としての任を果した。[17]

註

(1) 木崎良平「わが国におけるロシア研究の胎動――ベニョーフスキー事件を中心として――」（『鹿大史学』一三、一～五頁）参照。

(2) 木崎良平「ロシア通詞設置のころ」（『鹿児島大学史録』六、二一六～二一七頁）、および『通航一覧続輯』巻五四。

（3）新村出「蘭書訳局の創設」（『史林』一の三、『新村出選集』南蛮編坤、一一五～一四〇頁）。
（4）馬場佐十郎（貞由）『帝爵魯西亜国志抄訳』文化六年一一月成、凡例。
（5）木崎良平「江戸期漂民ロシア語書」（立正大学『人文科学研究所年報』二〇号、昭五八、七～一三頁）。
（6）阿部竜夫『中川五郎治と種痘伝来』、昭一八、函館無風帯社。村山七郎「日本最初の牛痘法文献の原書」（『順天堂医学』一一の二、昭四〇）。木崎良平「漂民久蔵の意義」（『鹿児島大学史録』四、一八三頁）。
（7）『魯斉亜国漂流聞書』（木崎校訂本、『鹿児島大学史録』四、一七三頁）。
（8）木崎良平「西洋型帆船の嚆矢いろは丸」（『鹿児島大学史録』三、一三五～一三八頁）参照。
（9）『北槎聞略』巻八（『日本庶民生活史料集成』五、八〇一頁）。
（10）『環海異聞』巻三（叢文社本、七四頁）。
（11）シチェグロフ著、吉村柳里訳『シベリヤ年代記』、昭一八、日本公論社、四〇八頁。
（12）ズギブネフ、播磨楢吉訳「露国に於ける日本語学校の沿革」（『史学雑誌』三三の一〇、七九七頁）。
（13）『シベリア年代記』四〇〇頁。
（14）ズギブネフ、前掲論文、七九九頁。
（15）亀井高孝『大黒屋光太夫』、昭三九、吉川弘文館、二六八～二七〇頁。
（16）新村出「伊勢漂民の事蹟」（『新村出選集』巻二、二五五～二五八頁）。
（17）『リコルドの日記』（ゴロウニン著、海軍省軍令部訳『日本幽囚実記』、四六二、四六九頁）。

五、露米会社の手による送還漂民

前章で見た如く、薩摩・尾張漂民の送還が、単なる放還に終ったことにより、ゴロウニン事件を機としておこった日露国境画定の問題は、両国の間に懸案として残った。しかし、ゴロウニン事件の一応の落着は、両国関係を鎮静化した。一八一八年にはレザノフの右腕および後継者として露米会社の発展につとめたアレクサンドル＝バラノフが没し、米英の積極的な北太平洋進出策と相まって、同会社による東方経営も消極化した。日本側でも、薩摩・尾張漂民の帰還後、ロシア船の渡来するものもなく、北方の脅威が薄らぐとともに、文政四年（一八二一年）、幕府は蝦夷地の直轄支配を解き、これを松前藩に返還した。

しかし、一八三〇年代に入ると、イギリスの東アジア政策の積極化、アメリカの広東貿易進出の企てと呼応して、ロシアは再び対日接渉を強化し、日本との通商関係樹立のための手段として、漂民送還を再開した。本章で取扱う漂民は、この時期の漂民で、㈣越後早川村漂民、㈤越中長者丸漂民、㈥紀伊天寿丸漂民の三例である。

㈣ 越後早川村漂民[1]

天保三壬辰年（一八三二年）一月[2]、松前でかずのこなどを積み、江戸へ向う途中、三陸沖（推定）で遭難した北前船（船主の商号は角長）の乗組員、越後早川村（村上市早川町）の水主次郎右衛門・伝助（『蕃談』では伝吉）・長太（『蕃談』による。『時規』では長とのみある）ら七名。漂流中三名死亡。天保三年閏一一月、オアフ島ワイアルア付近に漂着[3]。同地在住の広東人が手伝って、船をホノルル港へ曳航中バーバース岬沖で難破（『蕃談』）。生存者四名はアメリカ捕鯨船の手伝いや、広東商人パペーヨ経営の甘庶園の手伝いをして、一八か月間[4]ここに滞在した。

天保五年、アメリカ海運業者ミツバラニの世話で（『蕃談』[5]）、オアフ島発、オホーツクへ送られる。同地越冬中一名死亡。天保六年露米会社の船でオホーツクからシトカへ送られ、天保七年五月、ドミトリー＝イヴァノヴィチ＝オルロフ少尉の指揮するウナラスカ号でシトカ発、天保七年七月[6]、北海道厚岸沖へ着いたが、陸上から砲撃を受け[7]、七月二五日択捉島フレベツ沖で、漂民三名は放還された。

註

(1) 越後早川村漂民に関する史料・文献は乏しい。ただ、次のような史料の中に断片的な記事を見出すのみである。

(ア) 遠藤高璟『時規物語』嘉永三年五月成（『日本庶民生活史料集成』巻五、昭四三、三一書房）。本項は主として、この巻二による。本文中『時規』と略記。

(イ) 古賀謹一郎『蕃談』嘉永二年一二月成（『日本庶民生活史料集成』巻五）。この書の巻一に関係記事がある。

(ウ) 室賀信夫・矢守一彦編訳『蕃談』、昭四〇、平凡社、東洋文庫三九。

(エ) 木崎良平「越後早川村漂民」（『鹿児島大学史録』八、昭五〇、一七八～一八〇頁）。

(2) 上記(ア)巻二では、天保五年出帆とある。

(3)、(4) 上記(ウ)の九一頁。

(5) ファインベルグ『ロシアと日本』一一四頁、邦訳一四八頁。

(6) 外務省編『日露交渉史』、昭一九、原書房、二九頁。

(7) 向山源太夫『接蕃年表』には四名帰るとある（平岡雅英『日露交渉史話』、昭一九、筑摩書房、二八五頁より引用）。

㈤ 越中長者丸漂民[1]

天保九戊戌年（一八三八年）閏四月二四日、富山古寺町能登屋兵右衛門船、二一反帆、六五〇石積、長者丸に、船頭吉岡屋平四郎

以下一〇名乗組み、富山藩御用米五〇〇石を積んで、越中西岩瀬（富山市西岩瀬）出帆、大坂に向う。乗組員は船頭平四郎の他、親司の京屋八左衛門・表（楫取）の片口屋八左衛門・岡使（賄）の鍛治屋太三郎・片表の四方善右衛門・水主の土合屋六兵衛・片口屋七左衛門・米田屋次郎吉・五三郎・炊の中野屋金蔵の計一〇名。

五月下旬大坂着、米をおろし、綿・砂糖などを積み、六月中旬大坂出帆、七月六日新潟着。荷物を唐銀屋に届け、七月一六日出帆。八月中旬松前着、船宿上田屋忠右衛門方に止宿。九月中旬、楫取の片口屋八左衛門下船、越後早田村（新潟郡岩船郡朝日村）の金六が乗船。九月末松前出帆、箱館で昆布五、六〇〇石を積み、一〇月一〇日、江戸へ向けて同所を出帆した。一三日南部田ノ浜（岩手県下閉伊郡山田町田の浜）着、米三〇俵を鮪一〇〇本と交換、一一月上旬同港発、二日後に唐丹港（釜石市唐仁町）に入る。

天保九年一一月二三日朝、唐丹港出帆、同港外の死骨岬沖で西風により遭難、太平洋上を漂流すること五ヵ月に及ぶ。その間、天保一〇年一月二四、五日に五三郎、四月一二日に善右衛門が死亡。同一五日頃、楫取の金六が遭難の責任を苦に投身自殺した。四月二四日（西暦一八三九年六月五日）東経一六九度、北緯三三度の洋上で、生存者七名は、アメリカ－マサチューセッツ州ナンタケット島籍の捕鯨船ゼームズ－ドーバー号（船長キャッサート）に救助される。航行不能の長者丸は焼払われる。

五月下旬、六兵衛はネウカヤウカ号（船長ジャイキ）、太三郎はネウヨログ号（船長ポーシタ）、八左衛門・七左衛門はネウベルグ号に乗移る。北洋で捕鯨の手伝いをし、九月上旬、平四郎・次郎吉・金蔵はハワイ島ヒロ着、ついでマウイ島ラハイナに入る。九月下旬、別の商船でマウイ島からオハフ島ホノルル着、牧師のカオカ方に止宿。それより前、九月上旬に八左衛門と七左衛門が、九月中旬にマウイ島を経て六兵衛が、九月下旬に太三郎がホノルル着、華商パペーヨ方に居た。一〇月二四日、船頭平四郎死亡、次郎吉・金蔵もパペーヨ方に移る。マウイ島などのパペーヨ経営の甘庶園の手伝いをしながら過し、天保一一年七月下旬、宣教師ハイラム＝ビンガムの世話で、イギリス船（船長セン）でオアフ島発、ペテロパウロフスクに向う。

天保一一年九月上旬（『蕃談』は八月下旬）漂民六名はペテロパウロフスク着、兵舎に止宿。のち、八左衛門はアメリカ出身の通訳の家に、太三郎・六兵衛は商人カルマコフ、次郎吉は商人ペヤジミンコ、金蔵はロシア人下士官の家に、七左衛門は病気のため病院に移る。一〇月下旬、次郎吉はカムチャツカ長官代理メッテル方へ、金蔵は一〇月上旬船長ニコライ方、ついで一二月中旬商人のヒチャパン＝ニコライ方へ移る。また、天保一二年三月頃、六兵衛は書記ウチラン方へ、金蔵は六兵衛のあとカルマコフ方に移った。六月上旬、病気の七左衛門を除く漂民五名、ニコライ号（船長ニコライ＝メットルス）で、ペテロパウロフスク発オホーツクに向う。

七左衛門も二〇日ほど遅れて出帆。

七月上旬（『蕃談』は七月一〇日頃）漂民五名、同下旬七左衛門オホーツク着、長官ニコライ＝ペコロヴィチ＝ウェコロシ方に止宿。天保一三年六月下旬、ロシア政府の漂民送還命令オホーツク到達。七月中旬（『蕃談』は六月下旬）漂民らオホーツク発、九月上旬（『蕃談』は八月一〇日頃）シトカ着、露米会社支配人アドルフ＝エトーリン少佐の別邸に止宿した。

天保一四年三月下旬（『蕃談』は三月中旬）漂民六名、アレクサンドル＝ニコラエヴィチ＝ガヴリロフ少尉の率いるプロムイスル号[2]（七五トン、ブリッグ型）で、シトカ発。別れに当り、エトーリンから漂民らの領主への贈物として時計を贈られる。五月二一日、厚岸沖大黒島附近に到着、住民の姿を見出せず、択捉島フレベツ沖へ廻航、五月二三日到着。同島詰松前藩足軽小林朝五郎が、同島請負人林右衛門の使用人三吉・清蔵・又兵衛・アイヌ三名とプロムイスル号を訪れる。同日夕刻、漂民六名は二隻の端舟に分乗帰国した。

註

（1）越中長者丸漂民に関する主なる史料・文献は次の如くである。

(ア) 遠藤高璟『時規物語』一〇巻、附録一巻、嘉永三年五月成（『日本庶民生活史料集成』巻五、昭四三、三一書房、三～二三七頁）。本項は主としてこれによる。

(イ) 古賀謹一郎『蕃談』三巻、嘉永二年一二月成（『日本庶民生活史料集成』巻五、二三九～三〇四頁）。鹿児島大学玉里文庫本は『蕃譚』と題する。

(ウ) 遠藤高璟「献上之御時規由来並用法之覚」嘉永二年三月一八日成（石井研堂編『異国漂流奇譚集』、福永書店、三九二～三九六頁）。

(エ) 室賀信夫・矢守一彦編訳『蕃談』、昭四〇、平凡社、東洋文庫三九。

(オ) 高瀬重雄「漂流記蕃談に関する考察」（『史林』四〇の一、昭三二、四五～五七頁）。

(カ) 『通航一覧続輯』巻一四八、昭四七、清文堂、四の八四七～八五一頁。

（2）ファインベルグ『ロシアと日本』一一五頁、邦訳一四九頁。

(六) 紀伊天寿丸漂民[1]

嘉永二己酉年（一八四九年）一〇月四日、紀伊国日高郡天田組（『犯科帳』）薗浦新町（御坊市）の和泉屋庄右衛門船天寿丸（『南紀徳川史』・『犯科帳』）九五〇石積（『談奇』・『南紀徳川史』）に、一三名乗組み、みかんを積んで有田郡大崎浦（和歌山県海草郡下津町大崎）出帆、江戸に向う。乗組員は船頭の九助（『談奇』・『犯科帳』・『南紀徳川史』では虎吉）・楫取長助・賄菊治郎（『談奇』は

菊松）・表仕甚蔵（「届書」は辰蔵）・水主の浅吉・新吉・与吉（『蕃話』は文吉）・清兵衛・市楠（『南紀徳川史』・『犯科帳』は市蔵）・半六（『蛮話』は半蔵）・太郎兵衛・吉三郎（『蛮話』は吉松）・炊の佐蔵の計一三名。

熊野灘に出たところで、東風に遭い、同夜は橋杭（西牟婁郡串本町橋杭）に潮懸りし、翌一〇月五日夜五ッ頃出帆。一〇月一二日（『談奇』・『漂流記』）浦賀着、船改めを受け、江戸着、荷物を取払い、同月二〇日（『漂流記』は二三日）鰯油粕四八俵積入れ（『蕃談』）出帆、浦賀で船改めを受け、翌二一日（『漂流記』は二四日）伊豆下田入港。二二日出帆、駿河清水沖で西風に遭い、伊豆子浦（静岡県賀茂郡南伊豆町子浦）に戻り越年。

嘉永三年一月六日七ッ時、伊豆子浦出帆、夜半駿河沖で北西の暴風に遭う。八日夜半檣を切る。南へ漂流、一〇日八丈島附近に至る。以後東北へ漂流すること（『談奇』）約五〇日。二月下旬、東の強風に遭う。三月一二日（西暦一八五〇年四月二三日。『漂流記』では三月一三日）、ルセ（ロシア）沖で[2]、アメリカ浦鯨船ヘノニラ号（『談奇』による。ヘンリーニーランド号、船長クラッカ、二千石積位、バンバエの内本邦ヌベシの船）に助けられる。三月一八日（西暦四月二九日）浦鯨船モリコ号（『談奇』による。マレンゴ号）に出会い、長助・半六・清兵衛・甚蔵・太郎兵衛・与吉の六人が乗移る[3]。三月一九日（西暦四月三〇日、ロシア暦四月一八日）ペテロパウロフスク到着（「届書」）。

ヘノニラ号に残った船頭の九助ら七名は、捕鯨を手伝い、四月一〇日（西暦五月二一日）別の捕鯨船に出会う。新吉・浅吉が乗移る。五月二〇日（西暦六月二九日、『談奇は』七月上旬とする）に、捕鯨船カバ号（『談奇』・『漂流記』）に出会い、市楠・菊治郎（『談奇』・『漂流記』では佐蔵も）移り乗る。八月一〇日[4]（ロシア暦九月三日）、新吉と浅吉がペテロパウロフスク到着、ロシア組八名となる。一方、アメリカ組の九助・吉三郎・佐蔵は七月下旬（『談奇』・『蛮話』は七月一八日）に極洋を離れ、九月四日（西暦一〇月九日。『談奇』・『蕃話』・『漂流記』）にオアフ島着[5]。やがて、菊治郎・市楠も到着。五人は同島で土佐漂民四人[6]と会い、同漂民寅右衛門方に止宿。一〇月一一日[7]（西暦一一月一四日）、コッペー号（『談奇』）でオアフ島出帆、嘉永四年二月四日（『蛮話』）香港着。四月四日マカオに渡り（『蛮話』）、翌日（『蛮話』・『談奇』・『漂流記』）フランス軍艦で同所発、マニラ・厦門を経て六月八日（『談奇』・『漂流記』・『聴書』は七月上旬、『南紀徳川史』は六月六日とする。六月八日は西暦七月六日）上海着、中国役人に引渡される。七月八日（『談奇』・『漂流記』。西暦八月四日）上海発、七月二二日（『談奇』。西暦八月一八日。『漂流記』は七月一三日着とする）乍浦着。長崎五島出身の漂民六人と会う。一一月二〇日（『蕃話』・『南紀徳川史』。西暦一二月一二日）乍浦発、同二八日[8]（西暦一二月

二〇日）二番唐船（『犯科帳』）で、九助ら五名は長崎に帰着した。

ロシア組八名の方は、嘉永四年五月一五日（「届書」。ロシア暦六月二日）半六病死。六月二〇日（七月六日）生存者七名、ロシア軍艦でペテロパウロフスク出帆（『蛮話』）、七月七日（七月二二日）アヤン港着（『蛮話』）、九月一日（九月一三日）露米会社の船で同港出帆、一〇月一日（一〇月一三日）シトカに着く（『蛮話』）。のちに漂民を下田に送還したメンシコフ公号船長リンデンベルグおよび商船学校生徒スヴィニインとともに、一六五〇語を含む露和辞典を編集、日本のいろはをロシア文字で書き表わしたもの、日本の数字にヨーロッパの数字と発音を附したもの、日本の貨幣の価値と模様を説明したもの、日本に関する統計的報告書二冊を作成。[9]

嘉永五年四月二三日（『蕃話』・「届書」。五月二九日）漂民七名は、リンデンベルグの率いるメンシコフ公号[10]で、シトカ出帆、六月二四日（七月二八日）伊豆下田港入津（『蛮話』・「届書」）、上陸を許されず、同月二九日（八月二日）小舟二艘を与えられ、伊豆中木村浜（南伊豆町中木）に上陸した（『蛮話』）。

註

(1) 紀伊天寿丸漂民に関する主なる史料・文献は次の如くである。

(ア)『漂流船聴書』嘉永五年六月二一日付、嘉永六年七月木藤正明写（荒川秀俊編『近世漂流記集』、昭四四、法政大学出版局、二一八～二三二頁）。本項は主としてこれによる。本文中『聴書』と略記。

(イ)『紀州船米国漂流記』（石井研堂『漂流奇談全集』、続帝国文庫、明治三三、博文館、九三六～九六七頁）。本文中『漂流記』と略記。

(ウ)「嘉永五壬子年六月廿八日韮山御代官御届」（『通航一覧続輯』巻九八、三の六三七～六四〇頁）。本文中「届書」と略記。

(エ)『漂民蛮話』（『通航一覧続輯』巻九八、三の六一八～六二四頁、および六四一～六四四頁）。本文中『蛮話』と略記。

(オ)『漂客談奇』（『通航一覧続輯』巻九八、三の六二四～六三七頁）。本文中『談奇』と略記。

(カ) 堀内信編『南紀徳川史』巻二〇、昭徳公第一、明治三一（名著出版複刻、昭四五、第三冊）。

(キ)『長崎奉行所犯科帳』（森永種夫編）。本文中『犯科帳』と略記。

(ク) 木崎良平「嘉永五年帰着の紀州漂民について」（『鹿児島大学史録』五、昭四七、一七四～一七六頁）。

(ケ) 同「下田帰還紀伊天寿丸漂民について」（『史正』七、昭五四、二～二一頁）。

(2)『蕃話』では東蝦夷地沖。『漂民録』（下村英恕著。荒川秀俊『日本漂流漂着史料』、昭三七、地人書館、所収）では、ヲロシヤ沖五十度とする。

(3)『談奇』・『漂流記』に、八人乗移るとあるが、これは誤りであろう。『蛮話』によれば、漂民らがアメリカ捕鯨船に救助されたのは三月一九日で、翌二〇日メテリハースカ（ペテロパウロフスク）入港、二四日、太郎兵衛ら六人とここで別れ、九助ら七人は別のアメリカ船に乗った

とあるが、これも誤りであろう。「届書」には、乗組員計一二名とし、初め虎吉（九助）らアメリカ組六人と長助らロシア組六人とに別れたとあるが、これも誤りと思われる。

（4）『蕃話』には、嘉永四年八月一〇日とあるが、これは嘉永三年の誤り。

（5）『聴書』は九月下旬オアフ島着とするが、「此所に六十日程滞船、……十月下旬同所出帆」とあるので、九助らのオアフ島着は九月上旬であろう。土佐漂民万次郎は、一八五〇年一〇月末オアフ島で、入港して来た寅吉（九助）に会ったと証言している。これは嘉永三年九月末になる。しかし、万次郎はこの時天寿丸乗組員五人が一緒に入港したように書いているので、この時入港して来たのは、遅れて到着した菊治郎・市楠であったとも考えられる。（吉田正誉『東洋漂客談奇』嘉永五年冬成、『日本庶民生活史料集成』巻五、六〇五～六〇六頁、参照）。

（6）土佐漂民四人とは、天保一二年（一八四一年）一月七日、土佐沖で遭難し無人島に漂着、アメリカ船に助けられ、同年一一月オアフ島に至った伝蔵・その弟重助・五右衛門・寅右衛門・万次郎のうち、弘化四年（一八四七年）に死亡した重助を除く四人。（前掲『東洋漂客談奇』・中浜東一郎「中浜万次郎漂流記」、『伝記』二の八、昭一〇、参照）。

（7）『談奇』・『漂流記』による。一〇月一一日は西暦一一月一四日。『聴書』は一〇月下旬出帆とし、『蛮話』は九助らのオアフ島到着を九月四日、同所七〇日ほど滞在、一一月一五日出帆とする。『蛮話』の日附は西暦と思われ、その日本暦一〇月中旬説が正しいと思われる。

（8）九助らの帰還過程の日附は、西暦・中国暦・日本暦が錯綜していて、明瞭でない。上記(ケ)の論文（『史正』七、六頁）参照。

（9）ファインベルグ『ロシアと日本』一二五頁、邦訳一六一頁。

（10）「届書」には、「長さ二一尋半、幅四尋半、カピタン水主共三五人乗、但艀五艘、大筒六挺（長四尺程、巣口経三寸九分）、唐銅二挺（長二尺五寸程、巣口経二寸六、七分）、小筒類品々」を積んでいたとある。ただし、船名は挙げられていない。

以上見た如く、これら天保・嘉永期の漂流民は、いずれも直接ロシアもしくはその勢力範囲に漂着したものではなく、ハワイ諸島を経由し、そこから帰国の手段としてロシアに送られ、営利企業体の装いをつけながら事実上はロシアの行政機関化していた露米会社の手によって送還されて来たところに特長がある。つまり、寛政・文化期のロシアへの漂流・抑留日本人の送還が、対日交渉の手段としてなされたという伝統もあって、天保・嘉永期においても、ロシアは漂流日本人の送還に熱心で、これを手掛りに対日交渉を進めようとしたのである。この点において、ロシアへの漂流民、ロシアによる送還漂流民は、他の地域への漂流民と異なり、日本開国史上に特別の意味を持っていると言える。

ところで、この天保・嘉永期の三つの漂民のうち、越後早川村漂民と長者丸漂民は、ロシアが従来漂民を送り来たった択捉島に送還されて来たのに対し、天寿丸漂民の一部は、江戸湾近くの下田に送還されて来たことが注目される。ロシア外務省アジア局長L＝G＝セニャヴィンの一八五〇年（嘉永三年）九月中旬のニコライ一世への上申書に見られる如く[1]、「従来の交渉が日本のごく小さな

島（択捉島）の下級機関と行われたことにより、満足すべき結果を得られなかった」ことに対する反省であり、「日本の主要な島の一つに」漂民を届け、より強く対日通商関係樹立を図ろうとしたのである。

特に、長者丸漂民送還の時、松前藩足軽小林朝五郎らとの接触により、友好的な感じを受けたA＝N＝ガヴリロフは、その翌々年の弘化二年（一八四五年）にも択捉島に来たが、この時は通訳を持たず要領を得なかったので、天寿丸漂民の送還に当っては、前述の如く、かれらの助力を得て露日辞典を編纂するなど、準備を整えて下田に来航したものと思われる。(2) しかし、この試みも、天寿丸漂民の単なる放還に終り、失敗した。以後ロシアは、もはや漂民送還を名とせず、また露米会社の旗の下にそれを行うのでもなく、直接国家の手による純然たる外交交渉による日露国交樹立の段階に入るのである。リンデンベルグが下田からシトカに帰りつく前、すでに海軍中将エウフィミ＝ヴァシリエヴィチ＝プチャーチンを大使とする遣日使節団が、一八五二年一〇月七日（嘉永五年九月七日）、クロンシュタットを出帆、日本に向いつつあった。

なお、寛政・文化期のロシアへの漂流民が、カムチャツカや千島、イルクーツクに関する種々なる報告を残しているとすれば、長者丸・天寿丸漂民はアラスカのシトカに関する情報をもたらした。(3) また、長者丸漂民の漂流記、古賀謹一郎の『蕃談』などは、著者の国際情勢や海外事情に対する深い関心と相まって、当時の諸外国の動静、あるいは特に武備や船舶について精しく伝えるところがある。一方、遠藤高璟の『時規物語』の言語篇は、かの伊勢漂民の『北槎聞略』、仙台漂民の『環海異聞』、薩摩漂民の『魯西亜漂流紀』の言語篇とともに、江戸時代における四大露日辞典の一つをなしている。しかも、『時規物物語』の言語篇は、露日・日露の双解辞典の形をなし、それに英語・ハワイ語および少数ながら広東語・ベンガル語も付記されている。(4)

註

(1) ファインベルグ『ロシアと日本』、一二四～一二五頁、邦訳一六〇頁。

(2) オランダの防害を避けるため、長崎ではなく、江戸に近い下田を選んだ。（一八四三年七月一〇日付プチャーチンのニコライ一世への上申書。ファインベルク、同書一一五頁、邦訳一四九頁）。

(3) 前掲『蕃談』・『時規物語』参照。

(4) 木崎良平「江戸期漂民ロシア語書」（立正大学『人文科学研究所年報』二〇、昭五八、七～一三頁）参照。

六、あとがき

以上、安政開国以前の江戸時代におけるロシアへの漂流・抑留民について、まずは、できる限り正確に、その漂流・抑留経緯を示し、それに関する主な史料・文献をあげ、また、かれらの日露交渉史上における歴史的意義について考察を加えた。もっとも、その漂流・抑留経緯については、なお種々の誤謬を残し、また、遭難後の船員のとった処置等については、これを省略した。なお、それぞれの関係史料・文献は、主だったものに限り、特に帰還漂民に関するそれは、外国の史料・文献を省略した。また、漂流・抑留民の歴史的意義については、本文中でも触れた如く、かれらの帰国後の動静をもあわせ見て説く必要があるが、この点についても叙述を省略した。これらの点については、今後の機会を待ちたいと思う。

さて、江戸時代におけるロシアへの漂流・抑留民は、総じて言えば、彼我の文化交流に大きな役割を果し、相手国の研究の萠芽を形成した。一方、日露交渉史上から見れば、寛政以前の漂民（㈠元禄大坂漂民～㈣南部多賀丸漂民）は、ロシアに日本事情を伝え、日本への通路を示し、ロシア人に日本語を教え、ロシアの対日交渉の準備を整える役割を果した。寛政・文化期の漂民・抑留民（㈤伊勢神昌丸漂民～㈢尾張督乗丸漂民）は、実際に、日露直接交渉の媒介者として、また通訳としての役割を果した。また、かれらがわが国におけるロシア研究・外国研究の発達に刺戟材の役割を果したことも見逃せない。天保・嘉永期のロシアからの帰還漂民（㈣越後早川村漂民～㈥紀伊天寿丸漂民）は、日露交渉の媒介者・通訳としての役割においては、見るべきものはないが、露米会社の積極的な漂民送還を名とする対日通商関係樹立策は、イギリス・アメリカ船の再三の渡来と相まって、幕府にいわゆる鎖国か開国かの問題を身近なものとさせた。ロシアへの漂流・抑留民は、他の地域への漂流民と異なり、すなわち、単なる海難事故者ではなく、強くわが国の鎖国から開国への歴史と結びついているのが、その特長である。それに、何よりも、伊勢神昌丸漂民帰還以来の、漂民を媒介としてのロシアとの六〇年にわたる外交交渉の経験が、ペリーの来航に始まる安政の開国への道を、比較的なだらかなものとしたことは特筆されねばならない。